萬葉集書目提要　下卷

木村正辭著

第業集書目提要 下

明治二十一年八月發行

觀齋藏版

東京帝國大學圖書之印

萬葉集書目提要下巻凡例

本書の註釋。古〻よりいと多くして其類またさま〳〵なり。故に今それを八類によわかつ。

全注　全書を注せるもの。また本書中一巻たりとも全巻にわたるものをあぐ。

摘要　本文を摘錄して註解せるものをあぐ。

釋言　言語のみの注をしたる類。

類纂　同類のものを纂めたる類。

纂言　同言のものを纂めたる類。

撰歌　集中の歌を分類し。或は佳調のものを撰出たる類。

国立国会
29. 2. 15
図書館

319504

雜攷
雜說
以上

萬葉集書目提要下卷

木村正辭著

注釋部

萬葉集註釋二十卷

釋仙覺撰

世まれを仙覺抄といふ。卷首ゟ題号また撰者時代等の事を論じたり。此書古訓の誤りを辨じ。古書を引證して其訓を改め正せり。其說いまだしきこと多かれど。まゝ從ふべきものもあるなり。また引書ゟ諸國の風土記をおほく出せり。國々の風土記ハ多く散佚して今ハ傳はらぬが多かるを。此書ゟ引たるゟよりて。そのかたはしを窺ふ事を得るハ實ゟ吉光の片羽ともいふべし。卷一下の尾ゟ文永六年二月廿四日記」之記仙覺。建治元年十一月上旬」比以二作者仙覺律師自筆本一教」人抄寫畢。而後日校合。所」畧

等悉令書入之。同廿八日書入畢。同廿九日一校畢。同二年六月五日以抄寫本書入畢。同六日一校之。玄覺。まゝ弘安三年庚辰春正月癸卯朔庚戌。以本集一見了。管見之所、及押紙註之、權律師玄覺ゝ

あり。又巻二下巻八巻十三巻十五巻十八等の尾ゴ、各仙覺及び玄覺の記あり。また巻二十防人等の歌の注の末ゴ。已上此歌防人等が歌の詞ゝなこれ夷調ども也。或ハ又鬼語ふどもあひまじはりて。かたくふる詞どもなれば。すゑの世ゴやまゝゝこの葉もてあそばん人のまなぶべきゴもあらず。又ふるき口傳髓腦ゴもみえざるべし。つたへふき事どもなるが故なり。もし又强てその心ざし深くして思ひわかつ事あらんものハはやゝさとりぬべし。かたゝ〳〵志るし とゞむるゴはもゝがり待るべけれども。ときの世の契り深きをゝなきものゝ。松のゝぼそのうちゴすみなれて。此集歌の心志るしゝゞめてたまふ

べきよしすゝめ申ゴと度々になりぬるゴよりて。ばゞかりをかへりみず書ゝゝめ侍るなり。且ハ又このついでをもちて三世の佛たち。四方の大き聖の御いつくしゝ。此秋つしまのうちゴひかりをやゴらげちりゴまじハり給へるあまつやしろくまつやしろの御あはれゝをむくいたてまつらんゝ思ふ心ざし侍るゴよりて。昔時のゝこのおこりより初めてゆく末のねがひの契りゴいたるまで。申ひらゝべゝはべるなり。愚老おゝろへゝだれる末の代ゴあたりて。あづまのみちのはてゴ生れ來れる身なれば。竹馬の時より此事ゴ心ざしありゝいへども。そのゝなもゝをたつれ難かりき。これによりて年はじめてゝゝせあまりみつのゝとしゴり四十あまりゴいたるまで。あはせてみそぢか間。日ごゝゴ諸佛并を初めたてまつりて。秋つしまのうらゴ跡をたれましますおほゝ神だち。あまてる太神王城の鎮守。かも八幡の大明神ひえのなゴの社。又熊野のみたけ白山の權現。

東の國の伊豆箱根三島の大明神。ふじ諏訪鹿島香取の大明神。わきてハすみよし玉津島の明神。北野の天神山柿その外の歌仙聖靈等ゑ祈請をいたして。我今生を秋つしまゑうけたり。ねがはくハやまとことの葉のこなもことをさとらしめ。この一事ゑおいて無師自然の智恵をあたへ給ふべきよしをいのりこひ待りき。その志るしゑやありけん。卅一年ゑあたりて。萬葉集ゑ本々披見ゑ因緣自然ゑ出來れる事おほかりき。終ゑ寛元四年七月十四日萬葉集中諸本無點歌。長歌旋頭合百五十二首を抄出して推點をくはふる事すでゑ畢ぬ。其後又萬葉集の本々披見の因緣漸々ゑ出來するのあひだ。此集の中ゑ端作の詞といひ歌の詞といひ。もしハ落字もしハ損字。大躰たゞしきる者也云々。以上文。板本にハ誤字も脫字もあるを。今古本どもを校合し訂正して引く。○拾穗抄に云。萬葉ゑ於て仙覺由阿委き者と見ゆ。但其說ゑ於てハ故實を沙汰せ

ずしてみだりゑ自見をなせりと見ゆる所々すくなからず。且又出所來歷とて書出し中ゑ不審なきゑ〳〵もあらず。よく正しあきらめずして此兩法師の詞を證據とし用ひ待らば。あやまりを傳ふる事おほかるべし云々。その仙覺由阿が說ゑ中ゑ故實ゑ違る所々ハとるゑたらずといへども。亦是らが抄を捨てハ手舞足踏たつぎあるまじき事どもあれば。先師も是を捨ず云々。○橘守部墨繩總論云。仙覺萬葉鈔。此書歌ごとゑ釋せるゑもあらず。古點の謬をたゞして新點をつけたるもすべてぬき〳〵なり。其中ゑ愚老新點百五十二首といふこと見えたれど。是ハ殊更ゑ難歌ゑ分を書拔たる釋の事ゑて。今古點といふものとくらべ見るに。半ハ改められたらむとぞおぼしき。さて此鈔今に〳〵てハよるべきほどの考へも見えぜれど。此集ゑ埋れはてたるころゑしも深く心をつくして世ゑとり出せし人なりければ。同じふしも此律師の說を

のこさまほしく。かつハ後世ゑ傳たらざる風土記ともなあまた引れこされたる。もし此書なくハとおぼゆる事もすくなからねば。今引用の數にくはへたるなり。○清水濱臣清石問答云。書紀の釋紀。萬葉集の仙覺抄。源氏れ河海抄など。說れあしき事はあしけれども。今世ゑつたはるものゑて。これら書紀萬葉源氏の注釋のふるきかぎりなるべければ。これらを捨て何によりてか古說をうかゞふべき。古說をうかゞひ得ずしてハ。いかでか新考もいひ出む。かれば おのれハ書紀れ釋紀。萬葉の仙覺抄。源氏れ河海抄ハ學者のさふむべき書とおぼえ侍るなり。○兼良公さよのねさめゑ云。顯昭といひし人日本紀の神代よりの歌の心をかきあらはし。仙覺と云しもの萬葉れむねをえて。三百餘首順なだゑよみさかざる點をくばゝ侍り。

正辭曰。版本の仙覺抄ハ寫し誤りれいと多くして。よみがたきこころ少なからず。且一條二條つゝ脫たる所もあり。おのれ古寫本二本をもて校合しるゑよくきこえてこゝろこほるところなし。其一ハ奥ゑ寛永庚午之仲春於江府之仕暇書寫其五月初三之日其功了とあり。此本ハ友人守川捨魚藏せり。但し卷三より卷八ゑいたりて缺本なり。其一ハ温故堂藏本ゑて。卷尾ゑ文永六年孟夏二日。於武藏國比企郡北方麻師宇郷政所註之了。權律師仙覺とありて。次に建治元年十二月二日以作者仙覺律師自筆本教人書寫訖。同日一校畢。玄覺。次ゑ此十帖以律師玄覺之本如系圖令相傳。又重考分書入之。更不可有類本。雖爲一詞能々可惜。須如眼書不可說云云十佛とありて。全部十冊ゑわかてり。今本二十卷ゑわかちるハ後人れ志ゆゑゑて仙覺が舊ゑハあらず。また古本ハともゑ眞片假字ゑてかけり。今草假字ゑしたるハこれも後人れ志わゞ

なり。故ニ書中の誤字をもこの片假字まかへして考ふれば、其誤れるゆゑよし社志らるゝことおほかり。其中最誤の甚しきものを一つあげてしるす。古本ニナシ其ハ巻一ニ云。三山歌云々。此歌古點ニハたかやま濤 たらもねひをゝしと と点せり 其心たがへり。高山渡雲根火雄男志等と和すべし。かさたさハ同韻相通也。されば高麗をかのくまの人ハかくりといふ。事 古ニナシ志かれば香山とかきてもかくやまと讀同事也云々。○正辭曰今本ニハかとたさハ同韻相通也とあるハ、なほの由ともきこえず。古本の如くかならずウトクト同韻相通也といふべし。高字の音カウをカクニ轉じ用ゐるを明すなり。即その證ニ出しる高麗をかくりと云。香山をかくやまとよむ同事なりとあるまて志るべし。高香ともニカウの音なるをカクニ轉し用ゐるを云なり。但し高香をひとつにあげたるハくはしからず。香ハ喉内聲。高ハ唇内聲ニて。其韻もとおなじからず。されど高をカクに用ゐたる事ハ論なし。そは字音辨證にくはしく辨まへお

けり。これ即片假字のウをカ。クをタと見誤りて。やがてかさとハかけるなり。志かるを拾穗抄ニ此を引て今本の誤りのまゝまかけるハいかゝぞや。抑高山をカクヤマとよむ事ハ。實ニ仙覺律師の發明なるを。今本ニ誤りかけるハ口をしき事なれば。今本ハ誤りおほき事を曉さむとて。先此一條を引出さるふり。又近きころ板にゑりさる常陸風土記の首書ニ倭武天皇。萬葉仙覺抄所引天皇作尊云々といへり。されどこれも板本の誤りまて。古本ともニハ。天皇とあるなり。されば今本の仙覺抄ハかならず古本をもて訂正を加へされば用ゐがたき事をしるべし。序ニいふべし。書中私云私勘とあるものハ。皆玄覺が加へさるまて仙覺が舊文ニハあらず。これも心得おくべし。

詞林采葉抄十巻 寫本　　釋 由阿 撰

集中の枕詞名所名物又ハ故事等ハ事を注す。末ニ人麿朝臣の事蹟。又

古語拾遺。旋頭歌長歌短歌等の事。又書様時代撰者の事などを載せり。其説はすべて仙覺抄袖中抄等よりもとづき。其他古説を集めて一書とせるものなり。書中に引るる風土記もおほくは仙覺抄よりて引けるなり。但し版本の仙覺抄は誤脱いと多かれば。此書よりて今本の仙覺抄を補ひ正すべき事あり。最末は萬葉集點和の一條ありて。古點次點新點の事を論じ。其人々の姓名をあげたり。こはかはらずさる傳のありてかけるなるべし臆説はあるべからず。又仙覺律師の奏狀といふものを載せたり。こは他書はさえて見ることなきを。此書は載せるはいと〳〵めでたし。さて此書片假名まてかける本と平假字まてかける本と二種あり。その平假字まてかける本は俗本まて片假字のものの真本なり。余古鈔本三本をもちて校合せしに。本々同じからずして大同小異なり。よく〳〵參考して訂正せ

されば用ゐがたし。余仙覺抄と詞林采葉抄の二書を參考訂正して世に傳へんとおぼゆれどいまだはたさず。さて奥書に云去年貞治四秋比。二條關白殿下仰冷泉相公可參洛之由度々依被仰下。及今年五月中旬令上洛。於執柄家萬葉集一部讀進矣。以其次詞林采葉抄由阿抄出之備上覽之處。即被召置之被副御本萬葉集記。仍此草子既非私抄物乎。就中至第十卷者。冷泉二條雨流之差違粗記之。豈非以尺鷃之眼計大鵬之翅哉。然而大陽之光者管見知之。迅雷之響者蒙愚驚之。因茲或附古集之文理。或任先賢之舊記。所令採擇之也。然者此抄於異門偏執之族者不可許之。却而可致難破之故也。亦無萬葉集相傳人不可見之。深納籠之底莫出閫之外而已。貞治五年丙午五月廿五日。楡柳營邊藤澤山隱侶桑門由阿春

秋七十六歳記。〇右以二数月之餘暇一一部之書功成哉。謂二假名一謂二真名一謂二章句一謂二點和一不審非一也。雖然於二此本一者。由阿目筆本之段奥書以明白也。于時嘉吉元年三月十七日書功既訖。權少僧都恵珍。

萬葉拾穗抄三十卷　北村季吟撰

巻一二三四（各分上下）巻五六（全）巻七八（各分上下）巻九（全）巻十十一十二（各分上下）巻十三至巻十九（全）巻二十（分上下）以上共三十巻也。拾穗ハ即季吟の号なり。巻首ハ歌の員數の事時代の事。撰者ハ諸兄公と家持卿とハ決する事。撰者、傳題號ゆ事。點和ゆ事。仙覺所校ゆ本。書様の事。古注どもの事。古人ゆ用捨の事。等を載せたり。按ハ本書鉾、字皆桙と作るゆといづれの本も同じかるを。此本ハかゆとかゆと改て鉾としたりさかしらふり。注ハ多

く仙覺由阿宗祇の説を用ぬて稀ハ今案を加へたり。又毎ハ八雲御抄袖中抄見安等を引たり。別ハ發明したるごとハなし。毎巻の尾ハ書寫ゆ年月日まゝ所用の紙數をしるせり。巻二十の尾ハ云。貞享三丙寅年十二月廿九日辰刻終二再考之功一者也。新玉津島寓居士（六十三歳）とあり。さて此本のごとハ既二上巻ハ論じ置されば通考すべし。〇序中ハ云。先師逍遊軒（貞徳）若くて玄旨法師ハつかふまつりしより。八旬餘歳までハ萬葉集の註解ハ心ざしありて。諸本をあつめ諸抄を求めて吟翫せられしハ。學者ハ講習のいとまゝ子ハいひけらく。彼御堂殿の上東門院へまゐらせられしかな の萬葉集見出る事ありやと。多年心ハかけたりといへども見出ず。ひづかる 敦隆の類聚萬葉を得たり。此書萬葉のうたを假名ハ書て真名をかたはらハ書そへられし。童蒙初學の者にたよりあり。同くハ全部二十巻如此あら

まほしけれど。眼病堪かたくして今まこゝろざしをとげず。汝筆受せば思ひ立なん。其次手に諸抄を勘へて註解をもすべしとて。予を召て折々かうがへ志るされしに。二年ばかりのほどに第一第二の巻出來たりし。されど終に事ならずして身まかりぬ。其草案のさま予が胸臆にのこれりしも三十年前のことなれば。忘却の事のこゝながら。猶先師の遺志をむなしくせじとばかりに秃筆をとり侍し云々。

萬葉集代匠記 四十五巻。惣釋三巻。雜說一巻。枕詞釋二巻。拾遺三巻。寫本

釋契沖撰

惣釋目錄

集中歌數 毎巻注之。今但舉二惣數一。

長歌合二百六十六首○短歌合四千百八十六首○旋頭歌合六十三

首○三體都合四千五百十五首 注全歌二十首 詩四首 第五二首。第十七二首。○文一首 第五巻 ○序十三首 第五巻十首。第六巻一首。第十七巻一首。第十九巻一首。○狀十二首 第五巻六首。第十七巻五首。第十八巻二首。

作者

天子皇后太子皇子皇女 諸王女王大臣諸臣藤原女僧尼非常者遊行女婦白水郎等に部類して。此標目の下に各、集中に出たる 作者の名を悉く記せり。また人麿事蹟赤人事跡を載たり。

此末に集中に見えたる天象地儀鳥獸草木器財等の詞を。以呂波の次第をもて分類して。其下におの〳〵巻數張數を志るせり。其目錄左の如し。

○地儀○天象詞類○詠人名歌類○神祇類、詞大概○屬二禁裏一詞類

まほしけれど。眼病堪かたくして今まこゝろざしをとげず。汝筆受せば思ひ立なん。其次手は諸抄を勘へて註解をもすべしとて、予を召て折々かうがへ示るされしは。二年ばかりのほどは第一第二の巻出來たりし。されど終は事ならずして身まかりぬ。其草案のさま予が胸臆はものこれりしも三十年前のことなれば。忘却の事のこゝながら。猶先師の遺志をむなしくせじとばかりは秃筆をさゝり侍し云々。

萬葉集代匠記 四十五巻。惣釋三巻。雜說一巻。枕詞釋二巻。拾遺三巻。寫本

釋 契沖 撰

惣釋目錄

集中歌數 毎巻注レ之。今但擧二惣數一。

長歌合二百六十六首○短歌合四千百八十六首○旋頭歌合六十三首○三體都合四千五百十五首 注全歌二十首 詩四首 第五二首。第十七二首。○文一首 第五巻 ○序十三首 第五巻十首。第六巻一首。第十七巻一首。第十九巻一首。○狀十二首 第五巻六首。第十七巻五首。第十八巻二首。

作者

天子皇后太子皇子皇女諸王女王大臣諸臣藤原女僧尼非常者遊行女婦白水郎等は部類して。此標目の下は各、集中は出たる作者の名を悉く記せり。また人麿事蹟赤人事跡を載たり。

此末は集中は見えたる天象地儀鳥獸草木器財等の詞を。以呂波の次第をもて分類して。其下はおの〳〵巻數張數を志るせり。其目錄左の如し。

○地儀○天象詞類○詠人名歌類○神祇類詞大概○屬禁裏詞類

○人倫 附二肢體一不レ論二體用一

右惣釋一

地名 本朝總名並諸華國別名除レ之。

此末ハ地名兼天象人物等ノ類。似二地名一非二地名一類の二條あり。

右惣釋二

草木 附海菜○按に。此部中に芽ノ字をハギと用ゐたる義。又尊杜若莫鳴菜山振薄等の字の辨あり。

器財衣服等ノ類 ○漁獵詞類 ○舍宅類 ○田家詞類 ○車類 ○馬類 ○牛類 ○舟類 ○有二罵詈一詞類 ○名與レ物之歌類

右惣釋三

惣釋一の末ハ。元祿三年康午四月八日抄之畢とあり。

○雜說目錄 こハ本書にハなきを。今假に出るして其目をこゝに舉ゞ。

本朝ハ神國なる事。附歌の濫觴。又三十一字の句を陰陽の數に配する事。倭名の字の解。歌の功等の事。蛇狀の和名の事。○義訓の事○本書を證するハ本書より先の書をもてすべき事。○山城の名所をよめるハ。多くハ大和ハ近きかたなる事 ○本書の歌と後世の歌との辨 ○本集の歌の心得かた○歌ハ神道を本とすべき事 ○文字の正俗訓義の事 附東歌ハ五音相通同韻相通をもて見るべき事 ○假字切(カヘシ)の事 ○本朝と唐國との言語の差別○本集の時代また撰者ハ家持卿ふる事 此末に問答を設て旁難を斥けたり ○訓點の事 ○古注どもの事○校正ハ所用の本どもの事 ○此集ハ古來解し難き事どもせし事 ○歌の體 長歌短歌旋頭歌の事 ○本書ノ目錄の事 ○眞名假名の書やう並本書筆者の事 ○打亂てかける中ハ。選て心を著てかける處ある事 ○古風の詞古風のてゝをは ○本書ハ引用ものたる書ども ○歌の體の文質の事○本邦古來假名づかひ正しかりし事。又悉曇の論 ○字と牟と通ず

る事○言豐の事

以上

枕詞

本書より出たる枕詞を悉く摘錄して。そのつゞけたる詞の意を明したり。又稀より他書なるも出して注せり。末に序歌のあらましを擧たり。凡例に云。今集中ノ枕詞ヲ擧テ一部ニ亘ルヲバ此ニ注シ。一處二處ニアリテ彼處ニ注スルヲバ只其處ヲ指示ス。又序ト云モ枕詞ノ長キヲイヘリ。事ノ便ニ此集ニ出ヌヲモ思ヒ出ルニ隨テ注シ加フ。知ラザルヲバ知レリトセズ。次第ヲ作ル事ハ以呂波ニ依レリ。其中ニ假令バ石走淡海。石激垂水。此等初ノ二字同シケレバ。第三字ヲ以テ又次第ス。波ハ先ニアル故ニ石走ヲ先トシ。曾ハ後ナル故ニ石激ヲ

後トス。三字ヨリ及一句同シクハ。下ノ次第又是ニ依テ尋ヌベシ。四十七字皆是ニ效フベシ。良利留禮呂此五ノ言ハ和語皆下ニノミ連ナリテ。發語ト成テ初ニ有コトナシ。

以上

今所載の提要ハ精撰本よつきて云なり。此本水戸官庫の祕藏ふるゝ。塙保己一が申下して借覽し寫したるより。世に廣まりたるものにて。予も又一本を藏したり。但し是本序跋なく文中往々朱もてけちて又旁らに志るし。又ハ本行をすべてけちてその行間に小字にてものせるところもあり。これいはゆる再考の精撰本なるを知べし。これによるに其稿のなりたる後にも猶志ばしば改正したるものとこゝゆ。さて書體ハ本文を片假字もて志るし。又ハ初一二句のみを眞字にて擧て末ハ省けるもあり。すべて本文をは

省畧して全文を出さず。注ハ眞片假字交りまものせり。諸本の異同をばこと〳〵くさゐるしたり。此後の人の注ま官本水戸本などを引けるハ皆此書によれるものふり。又六帖或ハ撰集家々の集等ま本書の歌の入たるもの。本書と訓のかたりめあるをば大方ハ出したり。其外ハ雲御抄袖中抄等ま見えたるをもをり〳〵出して。古訓の異同を記せり。其博識見るべし。すべて古注ま泥まず日本書紀古事記等の古書を證として。本書の蘊奥を發明したるハまた卓見と云べし。縣居翁鈴屋翁などの說も此書よりとこゆる事いと多かり。釋氏まして皇國の道をひらきそめたるハ賞するに尚あまりあり。本書の注解多かる中ま此書と萬葉考とに出くハなし。されどまた互ま瑕瑜ハあるなり。今其優劣をいさゝかいはむま。此記ハ歌の意を解く事の精細しきま過て。考の直くやすらかなるまハ出かず。又古言古意を解く

事。考のかたはるかまされり。但し延約を專らさせしハ泥く過たるまて。此記の泥まざるまハ出かず。考ハ文字も訓も今本ハいたく誤れりとて妄りま改めたるを。此記ハ大方本のまゝて注したるハ穩當なりと云べし。たゞしあまりま今本をおし貴んて。かへりて曲說をなしたる事もあり。されど臆斷をもて忽ま改易して。古書の面目を失するまハまされり。又引書の博き事。考ハ遠く不及。出かれども徒に群言を蒐萃して遂に折衷する事あたはず。これ考のすみやかなるまハ出かず。これら大かた二書のおとりまさりなり。かくてまた人間ま流布するところの代匠記數通あり。其中今井似閑の序あるものを佳なりとす。

代匠記乃序　西山公に奉りし序なり

美ふの河その水の尾より出て。西山公ハ清和源氏なる故ま。水尾より出てといへり　ながれ久しき源

の朝臣。物部の道をならはし給ふいとまに。文の道をもこのみたまひて。ひだり右をそなへ給ふ。五つの車牛ハあへげと積つゝさず。四つのくら棟をさゝへてをさむはかりなるを。あかず見給ふるとて。菅の根の春の日まもゆふげの時をうつし。山鳥の尾の秋の夜まもねよこの鐘をかぞへたまハで。からやまとの歌も月雪の時まつけたるなさけの世まきこゆる櫻川の波のはなことばの林の枝まかよひ。なさかの海の玉藻心の池の水まうかべり。志かあるのこまあらず。志たのうきしま誠すゝなきをおきて。つゝ波山の高く神さびたるをゝり給ふと。やまと歌の中まハひきて萬葉集をもてあそびて。弓ゝもまも手まとり。つるぎゝひゝしく身をはなち給ふこゝろふし。そも〳〵古くより此集をば志ハすの月夜見る人まれまして。たまさかまは見る人も峰の志ら雪たゞよそ目なりければ。なかゝころ是をゝとせしものも。へみまあしをえがきていとゝ孤の疑ひなむすべり。此ことををしゝ給ひて。下河邊長流と云ものつたへおける文ありてよゝこの集をゝとくよしを聞たまひて。これが抄つくるべきよしをおほせらる。筆をゝらんとする折しも。少し心地そこなひてためらふとせしほとまよ。いつとなくあつ志れて年經て身まがりぬる事ハ。さいはひなくも侍るかな。をしむべき事まも侍るこゝまやつがれ彼の翁がさもがきの數まましはれる事。ゝしはゝをなゝいひつゝみつのはまべに同じく。志ほたれぬれども。もゝよりつゝりのそでまして。尾花よりもせはければ。何のひろひおける見るめもふきを。くゝつむゝふしからむとハ志りたまハで。聞おけるゝこゝもやある思ふやうもやあるゝ。木こりまも間ひ草かりまもはかりたまへれば。彼翁がまだいとわかゝつゝし時かたばかり志るしおけるまゝ。おのがおろかなる心を添て。萬葉代匠記と名付て是をゝゝぐ。おほくハおのがむねより出て憚おほけれど。なめかゝのこほりなめけなるつみをゝす

れて。あしほの山のあしかるとがをもゆるし給ふべし。識は才はあしつゝよりもうすくして。かほゝほゝの木ばかりあつけれど。たゞこれせりをつみて志つゝの田井をとばのあふみはそへ奉るものなりと。あられふりかしまのさきのかしこまり申はふむありける。

右年山紀聞巻一ニ所レ載

代匠記今井似閑序

ひとゝせ水戸西山公。師の和歌はふけり和書はいさをしある事を聞しめして。萬葉集の新注をつくらせ給ひければ。いはしへより人の誤り來れるをいきどほりましけるはや。程ふゝ萬葉代匠記草稿三十巻を編集して奉らしめ給。今書寫する所の代匠記是也。其旨自序は見えたり。されども公の御心はかなはず。いかんとならば世に行ふ所の原本をもて鈔し給へばなり。たゞへば記中は何誤て作レ何。何文字脱乎。此點誤れり如レ此點しかふべし注し給へる所々すくなからず。こゝはよりて官庫の御本中院家本飛鳥井家本阿野家本紀州本細川幽齋本水戸校本等の秘本をめぐみ給ひて。彼此校讐を加へ改め鈔出し給ふべきよしの仰ことをいなびかたくて。まづ比校し給ふは。先は今案をつけ給へるは符節を合せたるがごときの事すくなからず。此秘本どもをもてふたゝび代匠記六十巻あらたに注釋をくはへ奉らしめ給ふは。公その説の玄妙なるおどろかせ給ひ。ねもごろはめぐみ給ふあまり。頻はめせどもかたくいなびておもむかず。ときに板桓宗憐をもて公も亦萬葉の注釋を下し。代匠の説をも採用ひたまはんとす。功を一時はさげたまゝ奏覧を經。世はひろめしめ給はん。その内は代匠の説世はもらす事なかれとなり。師疑ひを公はさらんはりはて。清撰の代匠の草案までのこりな

と奉り給へばいよ〳〵ます〳〵おほんうつくしみあつく。身まかり給ふをりまでも。代匠は餘力とならん事ハ追々かうがへ奉らしめ給ふ。志かるゆゑは清撰の代匠ハ西山はのみありて世は傳ふる事なし。やう〳〵真名の序のみをあふぐりもとめて左はのするならし。其むね序中は詳ふり。さるによりて此代匠ハ公の御心にかなハざる所の記なれども。今予が聞所と考へ合するは。たがふこと十はしてふたつばかりならんか。おとは元禄壬未年高津は師の三回忌をとぶらはんとてまかりしは。弟子利元坊予が心ざしの淺からざりしをめで給ひけるはや。ふかく此草稿を匿は藏めおき給へりしを。ひそかは見せ給ひぬるより。心もそらまて白浪のたちぬはぬすむばかりしてとりかへりて。吉田氏ハ師の世はまし〳〵ける時よりの筆の得意は侍りければ。一字をたがへず書寫せしめ畢ぬ云々

予難波高津はまかりて。萬葉集の講演を頻は望侍りしは云々。高弟岑柏をはじめ門友をあつめ。春霞たちかさなれる比より秋風吹すさみ。野山のすがさかれるまでは功をとげ給ぬ。とし比のほい思ひとげぬるよろこぼしさのあまり。一言をだはもらさずきゝしまにうつしぬ。又師の數本と比校し給ひぬる本をもこひうけて。是も一字をたがへず書寫し畢ぬ。師もまた成功をとげぬる事をめで給ひ萬葉集竟宴などかたばかりの事とりおこなハせ給ひ。紅葉交松といへる題は人〳〵は歌はませ給ひけるは。序など手づから書給ひて。

たちまゝるきぬはひにし色やこれ紅葉はあける住よしの松

などとちすさみ給ひぬる事おもひ出し侍れば。袂もとちはてぬべく覺え侍りぬ。そのゝち此代匠記は予が聞書と見合せ侍れば。いさゝかたがへる事あり。い

かんとなれば。まづ代匠は二とほりありて。又追々考へ加へ給へる事清撰の代匠の後はもあれば也。こゝによりて不」全事のものゝ。我聞ところの本説又追て考へ給へる説。又師の見給ひざる書。予後は見及ぶ所を。私云と書て事をのこさず朱をもて書加へしむる物なり云々。」

正鮮按に此序は清撰本を六十巻といへれど。今水戸本を以て考ふるに。惣計五十一巻拾遺三巻なり。似閑もと本書を目撃せずして志るしたる事なれば據とするにたらず。

釋萬葉集五十巻　寫本　　權中納言源光圓卿撰

此書予巻一の注上下二巻を見しのこなり。本文を草假字もて志るし其行間は真字をかきそへたり。其體またく拾穗抄のごとし。但し注ハ本文の、次は低行はゝ志るせり。其説清撰代匠記と全く同じ。書皮は爲章校合したるよしあり。下巻の末は古萬葉集の序ハ僞作なるを。扶桑拾葉集は載たりしいあやまりふるよし論らへり。

釋萬葉　紀原水戸藩士伴五百右衛門筆記は云。源義様。萬葉抄御編集之義。年久敷思召ニテ板垣宗憺などは被ニ仰付一。書よせ考等仕候内。廿四年以前大坂妙法寺後ニ圓珠庵ト申候契冲と申僧。萬葉歌學緞練之由。達ニ高聞一。萬葉全部之抄被ニ仰付一之所。全体不」奉」叶ニ高慮一候付。其後思召之通。有ラ僧御好被」遊。又被ニ仰付一候處。是亦とくと入ニ御意一不」申候付。改而宗憺は被ニ仰付一。十六七巻目迄草稿出來申候所。十一年以前宗憺病死。其後私ニ被ニ仰付一候云々。只今迄宗憺編集之趣とくと不」被」遊ニ御覽一候間。初巻一冊致ニ清書一指上候様はと被ニ仰出一。入ニ高覽一候處。宗憺編集の趣も十分ニ不」被ニ思召一候。私ニ御直被ニ仰付一云々。五百右

衛門壹人ニテハ大部ノ物手つかへ可申思召ニテ安藤新介へも被仰付候ニ付申合相勤申候。御抄ノ一巻目并凡例一冊早々仕立指上候様ニ被仰付。出来次第公家衆へ爲御相談五百右衛門京都へ御上せ可被遊と内々御意ニ御座候。無程右ノ二冊出来指上候所。無殘所思召ニ相叶申候由御喜色ニ被思召候。其後安藤新介儀ハ京都案内者ニテ。公家方へも出入仕候へハ便り能被思召候由ニテ。私上京ハ御免被遊。新介へ被仰付。翌辰年罷上リ清水谷大納言殿へ右ノ御抄入御覽候所。古今無雙の注釋義説共ニテ。萬葉ノ傳授ハ水戸殿ヨリ御受候同前ノ由ニテ。御稱美ノ餘リ御内々ニテ被備仙洞叡覽候所。末代迄ノ重寶ニ被思召候。此通ニ何卒全部遂成功候様ニと叡感ノ上。書中思召も有之候ハヽ御加へ。可被遊

候間。清水谷殿ニも存寄ヲ何分ニも遂相談令成就候様ニと勅詔有之候。此段新介方ヨリ委細西山へ申上候所。甚御喜色ニ被思召候由云々。源義様御逝去被遊候翌年。新介私ニ申候ハ段々御抄草稿仕候内。二度目之抄。見申程量簡面白被存候。いづれの道なも宜方なる編立申候ハ御奉公ニ罷成候間。私とへ合點候ハヽ圓珠庵抄を取候て仕立可然之旨申候付。私申候ハ量簡之通尤の様ニ被存候へ共。又愚意を申候て見候ハヽ。御抄之義説共源義様思召と圓珠庵量簡と善惡之差別も。自分オ力無之候へハ難決候間。此段ハ暫指置。一往之道理を以申時ハ。御壯年之頃より被爲思召立候御抄。漸近年ニ至テ相極リ。公家衆へ御相談被遊叡覽ニ迄入申候御抄と申。御臨終之砌まで。此事のみを被思召。題號まで御極被遊候儀候へハ。御遺誡

と申物御座候。世間ニテ父母師長之遺言ニ少々筋目違候事も。遺言と申所ニテ見済聞済も有之例ニ候へて。縱此御抄不宜候共。思召之儘仕立申候方可然候ハんや。公家衆御稱美之儀も御自分存知之前ニ候。然ル御抄おもハしからずとハ被申間敷候と申候へて。一通り道理ハ聞え候へ共。去年上京之砌大坂へも罷越。圓珠庵へ御抄之趣見せ候へば。餘り氣ニ入不申。其上量簡至極宜様ニ存候。此段惣衆へも申談候へば。尤之由被申候と申候ニ付。其上ハとかう不被申候間。了簡次第と挨拶仕候。夫より仕立來候趣を相止。全ク圓珠庵後之抄を御抄ニ取用申候其以後校合之席ニも折々愚意を申見候へ共。承引無之様子ニ候故。無是非打過申候云々。」これによればもと西山公の思召ハ代匠記の說とハたがへるこゝもおほかりしを。後ニ安藤氏などの代匠記ニより私ニ改たるものとみゆ。其說の可否ハ知ねどともかくも一たび仙洞へ叡覽ニ備へ。かつハ公の思召ニもかなはせ給ひしさいへるを。後ニ改め易たるハ口惜きこゝちす。

釋萬葉集の跋

萬葉集之不明ニ于世ニ也久矣。如顯昭仙覺輩ニ纔窺一班。未能通其全。況其他哉。常陽水戸西山梅里公。負文武才藩ニ于一方。政治之暇把ニ玩此集。思爲之解。凡歷幾年所功成爲卷五十。題曰釋萬葉集。辱聞愚諸之日久。使其臣安藤子爲章貫藁本來。命加校正。其爲書也。解鮮達意考字正點或遠參和漢古今之典或近就集中比較前後。自相發明。精詳周備無有餘蘊。揭作者之意于千歲之上。解學者之惑于千歲之下。眞如宵得燈而渡得船。公之賜不

大哉。何更須愚有所增減一也。因述其意以爲跋。

元祿庚辰孟秋星夕　難波東高津圓珠庵契中拜書

右安藤爲章年山紀聞卷四ニ所載なり。

萬葉集童蒙抄八十卷　寫本　　荷田東滿撰

群書一覽に云。此集古人註釋の可否を辨じ。みづからの今按をくはへ。もはら童蒙をさとさんがためまたやすきことばを以て注せり。注釋の中本文の詞のみを朱書して見分ちやすからしむ。每卷東緣信書寫の奥書あり。此翁本姓ハ荷田ニして羽倉氏齋宮と稱す。契沖の晩年ニ國學を學ぶと云。賀茂眞淵ハ此翁ニ就て學べり。著述の書あまたあれども大やう燒失して傳はらず。今存するところ此童蒙抄。伊勢物語童子問等也以上

萬葉集僻案抄　寫本○卷數不定。余所藏本分爲三冊。　　荷田東滿撰

今存するところ本書卷一の注のみなり。此書本文をまづ出して。其次ニ草假字ニて其讀を擧げ。さて本文の句を一二句づゝ摘出して其下ニ注を下したり。其注解いまだつくさゞるところ多しといへども。さすがニ縣居翁の師とあふぎ尊みたる人の志ざしるこ。これまでの說どもニハよらずして自ら一家をなしてその發明もまた少なからず。卷一卷頭の御製の初句をかたまことよめるハ。契沖ニ暗合なるニや。又古本の異同或ハ朱書等を悉く引ていさゝか辨論をも加へたり。按ニ萬葉考卷一凡例にをしきかも仙覺が考へ合せし時までは。ことふるも多かりと聞ゆるを。今ハ只板ニ彫たるこ字ごとニ彫ておしたるのみぞある。荷田う志ざし月ニ求めていさゝか古き時書けん一つを得つこもこさまもかハらねど今の本よりはよき事侍り。且それが傍ニ朱もて書添たるニぞ助るおともあるなり云々といへるハ此事なり。此書全

部傳らざるハ遺憾と云べし。

萬葉集考六巻別記三巻人麿集一巻　賀茂真淵撰

本書巻一巻二巻十三巻十一巻十二巻十四の注なり。此書毎句の下に注を夾書す。舊訓の誤を發明したること多し。然れども正文を改め又ハ地を易へ或ハ刪去し。左注及或本の歌を削れる等に至りてハ。本書の體色を失すること甚し。巻第一の首に此集の大意を辨せり。その中皇御國の上つ代のことを知らむにハ。古き世の歌をしるに志くものハなきよしをいひ。漢土のをしへのよからざるよしを論らひたるハげにさるおとなり。また歌の調べの御代々々のうつりかはりを論らひ。人々の歌のよさあしさを。評めさるなど。かけても及ましきわざなりけり。また巻の次を改め且今の一二十一十二十三十四の六巻を原の萬葉として。其他ハ家々の集也といへ

るハさることなるべけれど。古くより今の如くなりけむと見えて。諸〻の古本ども皆今本と同じきを。今臆斷をもて忽に改たるハ妄りなりといふべし。さて此書の長短を一つ二ついはゞ。まづ古言古意によく通じていさかもきたなき漢意をまじへずいましへの真心を解あかし。さてやう〳〵神世の道にもいひ及ぼされたるハ。翁ならでハなしうまじきものをや。また本書の文字づかひいと〳〵あやしげなるがありて。代々の識者たちのおもひまどひまさるを文字ハかり物にしていかにもかきなさむを。詞ハしも此國のものにて主さるおさなれば。おろそかに見すぐす事なかれとかへす〳〵いはれさる。はた此書を見む人の楷梯とぞいふべき。されら長さするさおろなり。次に文字を妄りに改め易へ左注或本、歌等を刪削したま古言を釋に常にもとめて延約をもてせるなど。その短さするさころふり。また契沖を忌嫌ひてさかく其説ゆ非

をあげさるハ。僧なるを嫌ひさるまや。書中まに或人ハ云々として其非をいへるハ。多くハ契沖社說なり。

賀茂眞淵撰

萬葉集卷三之考一卷　寫本

此書岡本保孝ぬしの藏せるをかりて余も一本を謄寫しさり。撰者の名ハ志るさねど。其注千蔭が略解まに引たる翁の說とあへれば。眞淵の書なる事明らかなり。次なる狛諸成等が校訂の本とハ異ましてはじめ社六卷の考と其體いさゝかもたがはず。まことまに眞淵の原稿社まゝなるべく見えさり。但し別記ハなし。また卷首まに萬葉集卷三之考とあるハ。書手の筆誤なるべし。他卷の例まよるまに。卷十四之考とあるべきなり。

賀茂眞淵原稿
狛諸成等訂

萬葉集考十四卷　寫本

本書卷三卷四卷五卷六卷七卷八卷九卷十卷十五卷十六卷十七卷

十八卷十九卷二十の注也。此書紀州古學館またハ新宮丹鶴書院等に藏せり。小林歌城まことこれを藏すといふ。天明五年狛諸成の序ありて其序まに七十今の八七今の九五今の十九此四卷と竹取翁の歌の解とハ眞淵の稿本もあれど。其他の卷々を稿本もなければ其說の世まに傳ハらずなりなむことのうれたさに。其門友の人たちまはからひ前社稿本の體まならひて書集めたるなり。此事をさかと助けなしさるハ藤原ノ菅根藤原ノ宇万伎源ノ清良君さてハ尾張ノ黑主橘ノ千蔭等なりとあり。但し眞淵の說のわろしとおぼゆるをば。改正して今按を志るすとなり。今これを閲するまに刊本六卷の注社體とハいさゝかかはれるところありて。右の人々の今按などをも加へてあれば。賀茂翁の原稿まよれるものから。又自から一體をなせり。さて別まに發明志たるこゝハなきなり。

萬葉考槻叢葉二卷別記一卷

荒木田久老撰

本書卷三の注なり。久老ハ世々伊勢度會の神主ゝして初〻の名を世恭といふ。國學を縣居翁ゝ學べり。此書翁の萬葉考ゝ續て著せるふり。故ゝ一二の両卷をおきて卷三ゝりはじめゝり。考の如く妄〻ゝ次序を改易せず。卷ゝ次も舊本のまゝゝしゝがへり。其說ども大かたよろし。まゝ新ゝゝ發明せるものハ別記ゝしるせり。これまゝ十ゝ七八ハ其解を得ゝり。其中於保伎美と須米呂伎との別を論じ、枕詞の鹿玉の考ハ。殊ゝ從ふべき事なり。卷首ゝ本居、宣長、從二位藤原、持豐また天明八年六月の自序等あり。此ハ萬葉家のかならず見すべきあるまじき書なり。久老また日本紀歌解日本後紀歌解信濃漫錄等の諸篇を著せり。また本書の次々の卷なるも稿本ハありときけど。予いまだこれを見ず。

萬葉集旁註二十卷

釋惠岳撰

提要上卷ゝ見えたり

萬葉集燈五卷

富士谷御杖撰

本書卷一の注なり。但し凡例ゝ此書を注しおける事百卷あまりゝあれば。其稿本ハ全部ありしゝゝゆ。此書まづ本文を擧げ。次ゝ本文の句を再び摘出し。その下ゝ言解をくだしゝり。注首ゝ言、字を匡して標ゝせり。注の末ゝ靈、字を標して一編の意を釋せり。言釋の中てゝをはの意をゝける事の細密なる事ハ。其家の學びしるゝ諸注の及ぶゝころゝあらず。一首の意を解ゝゝるもこれゝ準ず。但し倒語といふゝゝをかへす〳〵いひて。全編の歌皆倒語なりゝて、其意ゝ解まげたるが少なからず。これ此書の瑕なり。おもひまどはさるゝ事なかれ。注中先輩の說を用ゐるゝころも多かるを。某云ゝ

いはずして皆自からの説の如く記したり。妄といふべし。詞の延約をみだりまいはず。かつ其延約ハ意の緩急によるよしいへるハさることにて従ふべき事なり。文政五年壬午正月の自序あり。

萬葉集略解二十巻　三十本

橘千蔭撰

千蔭氏ハ加藤号を芳宜園といふ。縣居翁の門人なり。巻三巻四巻十巻十一巻十二巻十三巻十四巻十七巻十九巻二十以上上下に分ちて凡て三十巻とす。本書の固有の旁訓を削りて今改めとる訓を漢字の左に方に草假字して志るせり。さて凡例に云。今本巻一仙覺が書る奥書に。他本漢字歌一首書畢。假名歌更書之常儀也。然而於今本者。爲紀和漢之符合。於漢字右令付假字畢。とありてもと日本紀竟宴の歌のさまに書けるものなるを改たりとみゆ。かく文字の右にかな付とるも見

やすけれど。此書ハかふをもはらとすべきなり。片かなハ見まがふ事もあれば。古きよりて今のいろはがふもて字の左に書り。されども長歌ハ一首書畢て更にかなもて書くハ見合せがたかれば。字のくだりのかたへごとにかなを交へて書つ。

○正辭按に。元暦校本其他古筆の萬葉切といふものを見るに。實にこゝにいへるが如しされど長歌ハ皆漢字の右に片假字もてさるして。別に假字歌を載たるものハ。京本巻二なると。家隆古本巻三に一首あるのみにて其他ハたえて見ることなし此書萬葉考と代匠記との両書をもとゝして大成せるものなり。其他本居宣長村田春海清水濱臣等の説を載す。自からの説ハいと〳〵まれなり。此中本居氏の説にハいとよろしきも少なからねど。文字を改易せんとせるにハいたくひがめたるが多くて。大かたハ従ひがたきことのこなり。すべて古書の文字を改易せん事ハ容易ならざる事にして。たやすくハすまじきことなるを。近き世の人ハともすれば誤字脱字のさたするにハみだりなる事多し。今此書に誤字なりとさた

めたるが。大かたハもとのまゝまてきこえたるをや。そハ余が著せる萬葉集文字辨證。同訓義辨證。同字音辨證といふものにくはしく論辨したるを見て知べし。其他かゝらずいふべきことをばいはずして。さまでいとでもとおぼゆる事をいとくはしくいへる。また同じ文字又ハ同じ言などのことかしとも出たるに。其とゝろよりて解ざまのたがへるはた少なからず。また注中ま引用したる書ども。多くハ考代匠記より孫引したるものまて。その書どもま誤れるがあれば。やがてその誤のまゝま記志たるもまゝあり。またその二書の説を用ゐながら。いさゝか其言をかへ或ハ省畧志たるまつきて。原書どもの意をそこねたるもあり。すべてかうやうのこと少なからねば。其心して見るべきなり。されど本書を全部まわたりて注釋したるもの。今世ま刊行志たるものハ此書の外にハあらざれば。先此まよりて本書の大意を窺ふべき事なり。縣居翁の考まハ巻ごと次を改め其他本書の面目を失志たることいとおはかるを。此書ハ巻の次も改めず其外大かたハ舊色を存志たり。又此書ま始て元暦校本の異同をところ〳〵出志たり。これら此書の長ずるところなり。枕詞ハ冠辭考まゆづれるよし凡例まこゆ。またすべて此解をあげつらひたすけしハ平春海源道別源駒弦なりといへり。寛政三年三月自序あり。又巻二十下の尾ま云此萬葉集畧解すべて三十巻。寛政三年二月十日より筆を起して。同八年八月十七日ま稿成れり。さてあまたゝび考へ正して。同十二年正月十日までまみづから書畢ぬとあり。かくて寛政八年より文化九年三月までま全部刻成志たるなり。但し刊行の後志ば〳〵改め正したりとみえて。前本と改正本との異ありて。其本まよりて注解のいさゝかづゝたがへるところあり。おれも心得置くべきことなり

萬葉集檜抄五巻　寫本

橘守部撰

本書巻一巻二の注ふり。一巻を各上下に分ちて別記一巻を附す。此書正文を擧げ片假字にて旁訓を附し。その正文の後に低行して。本文の句を再び一句づゝ抜出て句ごとに圈をおきて注を記し。その末に一首の意をとりすべて注せり。その説大かたよろしくこえたり。但し先輩の説の中にてよろしとおぼゆるをば。其まゝに用ゐたりげなるを。その人の名をひとつも忘るさゞるハあかぬ事なり。書中地理を明したるハいとこはしき事多かり。別記に反歌の説ありて云く。集中に反歌と記せるハ。長歌をうたふ時樂の調子の反しに借て用ひし短歌の名也。云々として猶いと長々しき辨論あり。こハいと奇説にていふにもたらぬ事なり（反歌の事ハ予別に説あり）されど初學のともがらふごハ。其説のめづらしくかつおもしろきまゝにつきて。おもひまどはさるゝふしもあらむかとて。序におろかしおくなり。

以上全注

萬葉集注抄書五巻　寫本

釋宗祇撰

世に宗祇抄といふ。此書拾穗抄群書一覽ともに五巻といへるにより。予藏するところの本ハ。勸修寺政顯卿自筆にていと古き寫本なれど。合して一巻とす。拾穗抄に引けるとハ少しく異同あり。巻一より巻二十までの歌を。巻々より四五首またハ八九首づゝぬき出て注を加へたり。歌ハ皆草假字にてかけり。巻々の首に萬葉注抄書第幾とあり。注中所々に采葉云とあるしたるもあり。又私云とあるところもあり。大方仙覺抄と詞林采葉抄とによりてかけるなり。また仙覺抄の序の全文を巻首に載たり。奥書に私云借用注本是まで少々書うつし侍ぬ。彼本ずゐ〳〵の巻ハ事〻外大やうまて

これぞと思ふ事も侍らぬまゝ。愚本抽書之。中其理心得侍らぬ歌數多侍り。雖然大かたは先志るしをたる所なり。此有増をおもひ立。折ふしおもひかけぬこゝろ心ちの事ありて。をこゝりながら猶我身ごなきやうは侍れども。思立しすゑをとげんとばかりは書付侍りぬ。さだめて書ちがへなどおほかるへくおぼへ候。万一御一見の人ハ御筆を入られなをし給べきものなりとあり

萬葉集管見二卷　撰者未詳

群書一覽に云。作者つまびらかならず。予がみる所第一卷より第四卷は至る蓋。闕本なり。〇正辭云。代匠記の首卷は似閑の書入ありて下河邊長流撰とあり。

萬葉選要抄九卷　釋恵岳撰

恵岳ハ常州雨引山の住僧ゴして名ハ俊道といふ。この書本文の初は一句を出して。本書の頁數を記し。その下は注をものせり。大概ハ眞淵翁と契冲師との説の可否を論じ。また今案を加へたり。されど皆臆斷僻説ゴして採用すべきものなし。また常は眞淵をおとしめ契冲を尊信するの僻あり。故はその論説甚強さる事多し。安永六年丁酉六月の自序あり。同八年己亥孟春刊行す

非選要抄寫本。卷數不定。

予見ところは本ハ五卷は分てり。此書釋、恵岳が契冲師の説をたてゝ。眞淵翁の説を破したるをいきどほりてかけるものゴて。その恵岳が説をことゝ〳〵く難破しゝり。されどこハゴもは僻書ゴして。實は見識のみ論ずるにたらず。且注釋の詞づかひ俗びていと〳〵つたなし。清水濱臣の泊洎筆話は云。縣居翁の門人は平高保通稱服部安五郎と云人ありけり。雨引山の恵岳とい

へる法師が萬葉集撰要抄と云書つくりて。一家の説をたて暗に翁云○正辭弱をいふ。の説を破りたることのあるをみて。○正辭云暗は破りたりとはいかゞ。其書のやうを見るに。つとめてわざと破りたるところいとふかくいきどほり非選要抄といふ物をかきいでゝ。吾師○正辭云。春海翁なり。おほかり。のもとに來りて意見をあへり。師は一わたり見られたるのみにて。惠岳が不學無才もとより辨をまたずして。具眼のもの誰か見ざらむ。とぬしが辨いはれざるにはあらねども。かゝるをこ人にむかひて言葉つひやし。其かひあらじといはれしかば。高保もげにさりけりとうべなひてそのまゝにやまれき。又萬葉大注三卷考解萬葉集一卷。いづれも學の程あらはれてめてたき考ども多し○正辭云。その書きはめて僻書にして採用すべきことゝいと稀なり。今めでたき考ども多しといへるはいかゞ。おもふに濱臣は其書をよくも見ずして。一わたりのうへにていへるものなるべし。

萬葉集大注 寫本。卷數不定

服部高保撰

泊洒筆話に三卷とあり。予が藏せる本は七冊に分てり。一卷は四十五六枚ばかりづゝあり本書卷一より卷二十までの難歌難語を拔出して注釋を加へたり。其説多くは僻説にして採るべきことはいと稀なり。且注の言鄙びていと拙し。されどいかにもつとめたるものとはこゆるなり。卷尾に寛政四年秋九月考訖平高保とあり。又卷尾に平高保俗稱服部安五郎賀茂眞淵の門人也。東都奉仕大樹公二少臣也。牛籠赤城明神下後四谷左門町住。寛政五年九月六十歳沒。辭世歌曰 和藝(ワゲ)たちのかきりなりけりいと子ともかほよせもてこ見てこそ志なめ○右は萬葉集大注卷一より卷十三の初なで有之夫より末失しを。高保所持なせし萬葉細注をもてかきたし。またき本さなしおけるはなん。弘化四のとしみな月市川平の寶雄しるすとあり。

萬葉集變考三卷 寫本

高井宣風撰

この書上中下三巻に分ちて。巻のはしめごとに信濃高井宣風考とあり。巻一より巻二十までの長歌短歌をところ〳〵ぬき〳〵に注せり但し端書の下に本書の張数をしるしたり。その注ハ本文の句ごとの下に分注せり。書中に註云とあるハ皆萬葉考の説なり。凡例の末に先哲の注に中またがへる事のあるをぬき出て補ふとあり。されどいと固陋にして且詞鄙びてとうのはず發明もなし。いと〳〵僻書なり。文化十三年八月侍從藤原信徳の序あり。こも詞とうのはずいとつたなき文なり。この本ハ數原某の藏本にて。これやがて作者の原本なるべくこえたり。

以上摘要

萬葉集見安二巻

撰者未詳

本書の中より巻の順に隨ひて難語を摘出して略注を加へたり。巻首にハ題名をしるさず。巻尾に萬葉集註釋とあり。また萬治四年辛丑季春吉日中野氏是誰刊行としるせり。友人黒川真頼の所藏本の尾にハ。天和四年壬戌春上澣とあり。但し書賈印版を購得て其尾題を改めたるものにて。別版のものあるにハあらず。また其書皮の簽に萬葉集秘決と題せり。さて分ちて四冊としたり。國朝書目に載せたる冊數も四巻とあれば。かく分ちたる本ももとよりあるなり。○見安補正の序に云。萬葉集目安一云見安といふふみハ何人の志るしおかれしをしらず。或〻堯以法印のえらびふりといふ云々。○拾穂抄に云。萬葉難義一名萬葉見安といふもあり。詞の注ふまやかなるを撰び用ゐられ侍し。○群書一覧に云。萬葉集見安一名萬葉集難義一名萬葉集秘訣。作者つまびらかならず。此集の中の解しがたき詞どもをあげておほむねを注せり。○正辭按に其注ハ別に取べき事もなけれど。本文の

詞をば真名にまゝて出しられば。文字に異同をくらべ見むはいとすがゝ古きもになれば。自ら一本に用をふせり。

萬葉集撰要注詞上下二巻　撰者未詳

此書塙保巳一に舊藏なり。序跋なく作者に名氏もふし。上巻に首は萬葉集撰要注詞とあり。第一より第十までを上巻とし。第十一より廿までを下巻とせり。本書巻一より巻二十までを。巻々に次第は隨て。長歌短歌に中より詞によろしきを一二句又ハ三四句づゝえり出て。其下はところ〳〵其詞に釋をいとゝかづゝ加へたり。こハ本書に詞によりて歌よまむとする輩にゝめは集めたるものなるべし

萬葉集見安補正十巻　四本　池永秦良撰

寛正八年難波人餘齋の序あり。すなはち上田秋成なり。見安補正とあれど見安の事ハさらはなし。たゞ其體を見安はならひたるをもて名づけしふるべし。此書池永秦良といふ人の稿本を秋成が訂正したるよしなり。本書中より一二句づゝ拔出して。五十連音は分類し。其詞の下は畧注を加へたり。めづらしき說ハ見えず。かつ先達のときおかれたる事も自らの說も分別ふく。たゞひとすぢは注をくたしたり。秦良の原稿はそれ〳〵說者の姓名をふるしたるを。こと〳〵く省きたるよし凡例はいへり。いと口惜き事なり。また凡例は假名の法則は泥むまじきよしをいひて。書中をり〳〵假名たゞひの解あり。いと〳〵みだりなる事はこそ。そハ此人の著せる靈語通の僻說なるまで推して忘るべし。

萬葉集撮要一巻　釋恵岳撰

本書巻一より巻二十までのうちの句をところ〳〵拔出て。契沖真淵の

訓の異同をあげ。また自らの案を加へたり。すべて上より出せる選要抄の注を摘録志たるのみなり。別よりかはりたる事ハふし。安永八巳亥年九月刊

源稻彦撰

萬葉梯上下二巻 小本

本書の句を一二句つゝ摘出して。以呂波の次第よりとかち巻數張數を志るし。其句の意を分注したり。注ハ多くハ先達の説なり。但し説者の名氏を志るさず。享和元年阪井積および自序あり。

以上釋言

萬葉類葉抄補闕十五巻。寫本

入江昌喜撰

群書一覽より巻首妙法院一品親王漢文の御序より云。萬葉類葉抄ハ延徳年間權大納言宣胤卿勅を奉して撰するところなり。爾來多くの星霜を經て一二闕巻あり云々。浪花の入江昌喜どゝふもの皇朝の古學を好む。

往歳命じて其闕を補ひしむ云々寛政丁巳春三月とあり。○此書言詞部七巻。本集の詞あるひハ上の句或ハ下の句の頭字をいろはの次第にわかちて。おの〳〵注釋をくハへたり。○奥書より云奉二妙法院一品法親王令二謹補一權大納言藤原宣胤卿所撰萬葉類葉抄闕言詞部七巻一寛政九年丁巳三月浪華入江昌喜謹識。于時七十六。同名所部七巻。名所を國分よりして歌をあげ。注釋より今案をくはへたり。奥書より云右依二契冲門人海北若冲之勝地篇所一編集一也。且聊加二代説今案一而已。○外より目録一巻を附す。凡例より云此抄より契冲の説のみを用ゆ。注曰々といふハことゝ〳〵く契冲なり。代匠記その外契冲著述の抄物をかうがへ。又若冲があつむるところの師説用之。以上文此書予いまだ見ず。故より今群書一覽の全文を擧るのみ。中御門大納言宣順卿記。寛文二年四月十日云。類葉抄書寫之事。

先日以宰相被仰下。中略類葉抄第一書寫之。次々冊蒙免。人書寫之第二相宰第三抑類葉抄。宣胤卿延徳三年依勅命部類之給。其御本宣胤卿異幹去年於禁裏御文庫燒失。其寫禁中殘御本也。○代匠記首巻似閑書入云雄大納言藤原宣胤卿萬葉類葉抄十三巻。奥書云。延徳三年依勅命部類之。○神祇部名所部詞部闕。予將補之久矣。未遂功。集名所有名猶山拾葉印本。暫以之補之耳。

萬葉集字要一巻寫本下

撰者未詳

此書本集は用ゐたる文字を一二字或は三四字づゝを摘出し。訓を施していろはの順は分類ふたり。其體釋春登が用字格のごとくしていと麁ぶり。余得るところの本僅は十三紙なり。訓はすべて舊訓を用ゐたり。これはよるに契沖眞淵などの改點以前の撰なること志るし。巻尾は享保二十

一年季春朔於二條錦城寫之とありて其下は 如此朱印あり。巻首題名の下は不忍文庫日下部文庫印あり。此書僅々たる小冊子といへども。名家の所藏たりしを見るべし。かくて此は春登が用字格の藍本ともいふべきものはこそ。

萬葉集類林十五巻寫本

撰者未詳

此書釋言。釋人物。釋宮。釋器。釋天。釋地。釋草。釋虫。釋雜等は部を立て。其ところ〳〵は以呂波の次第をもて本書の句を分類し。二言めをも。以つらね呂波の順に其下は他書の證とすべきものを出し注解をも加へたり。たよりよさものなり。其體式左の如し。

釋言

いそふ　第七十四神之祝我鎭齋杉原。第十　齋經社。第四　忌杉。

第十九　伊波布等毛比氏。鎭ト思而也　△いそひ。いつき。いむ。通てともよあまさよあり。かけるやう見るべし。

いはき　第四四十九　石木二毛成益物乎。　第五　同。又伊波紀欲利奈利提志比等迦。從二石木一生出人乎。　△行路難鮑昭曰心非二木石一豈無感。伊勢物語いはきよしあらねば心ぐるしこやおもひけん。

いはみ　第十三九　人多滿而。又同廿七　△日本紀滿屯結集溢營などかくのごとし。餘ハ準て知べし。

墨繩總論に云。萬葉類林とて寫本十五冊あり。作者の名も年季も記さゞれども。其釋文のさまを見るに。圓珠庵の高弟若冲の撰ならんとぞおぼしきゞすぐれてろよしとはあらねど。和訓類林の手際とはこよなう立まさりたるを思ふに。もしくハかの阿闍梨の西山公に奉れりし。清撰の釋ともをかゝへまほしみして。其注の内を若冲こそかに書抜おきけるを。後に自の考へをもくはへて類聚せしにやあらん。師説と云るは皆阿闍梨の説にして。其中にをり〳〵三之山城山科人木瀨氏　長流大和人後二津一國下河邊に住す　等の説をも載ながら。撰者の名を隱して序跋なども記さゞる。もしや彼卿の御疑を憚りてのゆゑなりけんとさへぞおぼ〳〵き。猶異本いろ〳〵あり。何れの本にかそれと志らるゝ事あらん。

萬葉緯二十卷　寫本　　今井似閑撰

群書一覽に云。此書を緯と名づくる事ハ。漢土の戰國秦漢の時に緯書といふものあるにならへり。緯ハ經緯の義にして布帛のたてを經といひ。ぬきを緯といふ。故に聖人の經書をたてとしてさま〳〵の説をささる書を緯書

と名づけて。かの經書のたすけとしたるものなり。両漢の諸儒みなおれを信用して古注のうちまおほく引用ぬたり。孝經援神契春秋元命苞等の如き其書七部あり。おれを七緯といへり。今此書も萬葉集を經として。その緯となるべき諸書をあつめあるひハ抄出して。かの萬葉をとくたすけとなすべき心まて萬葉緯と名づけたるものなるべし。巻首に洛東隱士見牛編輯とあり。見牛ハ別号にして偃鼠亭と号す。契冲の門人まして終まに臨て所藏の寫本二百餘部を賀茂の神庫へ納めたる人なり。○萬葉緯の目錄を左ましるす

巻第一日本書紀厚顔抄○巻第二古事記厚顔抄○巻第三續日本紀本文略。歌全。十四巻一首。十五巻一首。三十巻三首　日本後紀二巻三首。三巻二首。四巻一首。五巻一　續日本後紀十二巻一首。十五巻二首。十九巻長歌一首。日本三代實錄一首○巻第四此章雖レ非二古詠同類一。

將レ有レ便二古語一。依而集二于茲一。中臣壽詞。祭文。神樂舞歌。祝文。壺碑圖等。○巻第五大嘗會悠紀主基歌。二十一代集。夫木抄。歌仙家集。○巻第六踏歌章曲并東遊歌全寫内宮年中行事三十六首○巻第七神樂全寫○巻第八催馬樂全寫○巻第九風俗全寫體源抄。拾芥抄。今様○巻第十雜和州藥師寺佛足石圖歌二十首古語拾遺歌一首日本國現報善惡靈異記歌四首聖德太子傳畧歌四首江家次第歌二首江談抄歌十首和歌三式全寫扶桑略記歌一首明月記歌道事後撰抄歌一首曼荼羅緣起歌二首作者部類歌二首○巻第十一新撰萬葉集○巻第十二日本紀竟宴和歌○巻第十三眞名伊勢物語○巻第十四和漢朗詠集○巻第十五出雲風土記○巻第十六風土記殘篇○巻第十七風土記殘々篇○巻第十八諸書風土記全寫○巻第十九樂詠并郢曲。往古異年號○巻第二十

近世和歌（近世在二於古風之人一。擬二古歌一詠歌集二于茲一。）契沖講竟述懷長歌一首并短歌二首。

○莫囂圓隣新點。

一本十七下新撰萬葉二巻。真名伊勢物語二巻。和漢朗詠集二巻。右三部者世間刊行有」之。故畧」之 都合二十三巻。名二萬葉緯一。元禄十三年洛東隱士輯之と云奥書あり。

以上提要群書一覽甚詳かなれば。今これを擧ぐ。但し文中いさゝか誤脫あれば補ひ正しぬ。

萬葉用字格一巻　　釋春登撰

本書の文字を用ゐたるやうさま〳〵なるを。こゝ〳〵と類を分ちて明せり。但し詞を五十連音の次第に分ち。部中正音畧音正訓義訓略訓約訓借訓戲書の八〻の標目を立て。其目下に各其文字を出し。扨本文の句を一

二句つゝあげて。分注とせり。をり〳〵其音訓の注をも加へたり。其説大かたハ畧解に從へり。また其摘出せる文字の訓も略解によるよし。また音訓とも に定説なく疑はしき。またハ常にめなれて誰もまどふべきことゝふきハ省けるよし。凡例にみえたり。此書實に本書に文字づかひを見むにハいと便りよきものなり。されどもれるも誤れもいと少なからねば。本書の文字づかひこれにてつくせりとぞおもひそ。予此書の補正をあらはさんとおもへどいまだそたさず。文化十四年に刻す。狩谷望之序まさ自序等あり。

萬葉集猶落葉五巻　　正木千幹撰

此書ハ本書中より一ふしある詞をえり出て。天象地儀神祇釋教人倫國郷居處服食器財鳥獸魚蟲草木等に分類して。各その歌を草假字にてかきあつめたり。凡例に萬葉集にはじめてよみ出さる詞のかぎり。みやびかな

るめづらかなるおもしろきつゞけざまなどを始め。今の世の俗語なるべくおもへるも。早くこゝに見え。いましへ詞ならむとおもはるゝも此集などにあらぬ事を忘りて。歌よこ物かゝむためにかきつめおきつるが。數多になれるを。今はたゞり返し考へたゝして。天象地儀神祇釋教等の類をわかち。題をまうけて五巻となせりとあり。文化十二年越智千岡氏序清水濱臣の跋あり。

萬葉集略解目錄二巻　南陔撰

本書の巻々の々目錄を摘錄してこゝ〳〵に訓を施し。さてそのをゝしめの言を五十連音の次第に分類して。一一原書と畧解との張數を忘るして搜索に便ず。天保十四年の自序あり。

以上類纂

萬葉集東語栞一巻　寫本　田中道麿撰

本書巻十四また巻廿なる東歌の詞の中より通音の者を集め。五十連音の次第に分て。各その詞の下に本書の張數を忘るしたり。末に畧語の例を附す。

萬葉集類語十巻　寫本　小山田與清撰

五言七言の句を五十音の次第に分類して。其下に本書の巻數張數を記せり。但し其句は第二言めをまゝ以呂波假字の順に次第して。搜索に便ず。訓はすべて近人の讀改めるるものに從へり。いとよりよきものなり。此書もと巻數なし。今十冊に分てり。また撰人の名氏を忘るゝず。原書は水戸駒込文庫に收めたるものなり。予藏するところは其藩臣久米博高（俗稱彦助）の自ら寫しとりたる本なり。

萬葉集類語二十五巻　寫本　撰者未詳

これも上なると同じく。五十音の次第をもて五言七言の句を分類して。其下は巻數張數をしるせり。但し類語の下は片假字よて。其句の前後の句を一二句づゝ細書したり。その二言めをは次第を立ず。此書萬葉集中の詞ハことゝ〳〵く擧て。一句もれるものなし。これもまた巻數なし。今二十冊とせるハ後人の分てるなるべし。また撰人の名をしるさず。

萬葉集類句五巻　　長野美波留撰

本書の短歌のかぎりを集め四〻句のかしら字を伊呂波の次第よ分類せり。但し三字めまでを伊呂波の順よしたり。巻五の末よ別よ旋頭歌の部ありて同じく四〻句のかしら字をもて伊呂波順よ分てり。巻尾よ寛政十一年ひつじの春やよひよなむしるしをへぬ。志なの〻國はよしなの人藤はらのゝ晴ゝあり。

萬葉集類句三巻　　賀茂季鷹撰

本書の短歌と旋頭歌とを草假字よかき改め。さて四〻句の頭字をもて以呂波の次第よ分類せり。をり〳〵古訓さるがへるがあり。そハ羽倉御風孔說よ從ひてあらさめたるなりとぞ。凡例の末よ此書季鷹が江戸よ在しなり。撰出せし初よりたすけなせるハ。三島自寛武田有之源躬弦をはじめ源正賢。あるハ下總國なる橋本節之などこれ彼のいさをゝもてはやう案ハ書おきたれど。かよかくさはらふ事うちつゞきて今までよハなれるなり。文化二年九月賀茂季鷹とあり。巻末に文化三年丙寅初春刻成としるせり。

以上纂言

古葉略類聚抄零本五巻　寫本　　撰者未詳

此書萬葉一部をおの〳〵類をもて分ちたり。其提要ハ群書一覧よくわ

しぐいへればおゝよは省きぬ。巻一の奥は建長二年九月十二日書寫之。巻二の奥は建長二年九月廿九日書寫之。巻四の奥は建長二年十一月二日書寫之。巻五の中らに建長二年六月三日書寫之とあり。安永六年十月浪速江田世恭の序あり。余藏する所のものハ。舊詞花堂の藏よりて。影鈔本なり。故は原本の面目を觀るは足れり。○僻案抄は云。今引古葉略要集ハ見る人すくなかるべし。此書ハこの二十ゝせあまりのゝき春日若宮ノ神主大中臣祐宗朝臣。やつがれがもとは物まなびは來りしことあり。その比此集のことにをよびて。彼家は傳へし古葉略要集を祐宗朝臣もち來りて見せ侍し時。此集の文字のたがひども校合せしなり。古葉略要集いまは彼家はあるべし。○考は云。奈良の若宮の神主がもとる古葉類要集とて。集は中はゝぶかしき歌どもをのみ書つめたるあり。こも古本の中は入

つ。○略解は云。古葉略要集と擧たるハ。東万呂翁の僻案抄翁の考などよよれり。こハ僻按抄は春日若宮ノ神主大中臣祐宗物學びは來りて。彼家は傳へし古葉略要集を持來りて見せし時。此集は文字のゝがひども校合せしよしありて。賀茂ノ翁ハ此東万呂翁の本をもて異同を志るされたるものなり。但しこゝは略要集とあるハ。ふと誤れるものなるべし。まゝ考にハ類要集と志るせり。江田世恭が古葉略類聚抄の序は云。賀茂の眞淵が作れる萬葉考の中はそ。始て此抄を引て古葉略葉といへり。されども題号もたがひ抄のやういひゝるはもたがへる事あれば。志たしゝ此集を見たるはハあらで。おしはかりごとはいひたるやうなり。正辭云。こハそやゝ僻案抄に出るを。萬葉考の中はそ始て此抄を引てといへるハくはしからず。又略葉とある葉ハ要の誤なり。但し考の凡例はハ類要集とあれど。類ハ略の誤なり。即ち別記の

莫囂圓隣之の歌はとおろはハ古葉略要とあるなり。まゝ世恭の序ゝ抄のやういひたるゝもたがへる事あれはといへるハ。集の中ゝいぶかしき歌どもをのみかきつめゝるありといへるをゝがめたるなり。こハ實ゝ疑をし今本書を見るにいぶかしき歌のみ集めたるものゝとハおぼえず。且莫囂圓隣之の別記ゝ異同を志るして。本書を引たるも今本とあたず。されは世恭の說の如くおしたかりゝいひたるなるべし。

萬葉集名寄四卷　　下河邊長流撰

本書中ゝ名所をよめる歌の。今世ゝ歌よむたつきとなるべきをえり出て國ゝけゝして。其歌どもをその國々のところ〳〵ゝ平假字もて書あつめたり。まれゝ注を志るし又所々ゝ旁注をくゝへたり。自序および萬治己亥秋八月祖冲の跋あり。此書上下ゝゝかち。さて上之一上之二下之一下之二として四卷とせり。卷ごとのはじめゝ目錄あり。群書一覽ゝ五卷とあるハ誤なり

萬葉新採百首解三卷　二本　　賀茂眞淵撰

集中の短歌の志らべも意もよろしきを百首撰出て。おの〳〵類をゝかちて注釋をくはへゝり。本文ハ歌ごとゝ漢字の左ゝ草假字をもて訓を志るせり。部立ハ四季相聞羇旅遊覽古京皇居雜事宴會賀等ゝ分てり。此書作者の人がらしるゝさすがゝ從ふべきこと多かり。但し今本校合麁漏ゝして。をり〳〵誤字あり。卷首ゝ自序ありて。古への歌と後世の歌との可否を論じ。卷尾ゝ附說ありて近き世の人ハ近體の歌をよしとして。本書をば無用のものゝおもへるゝとのひがごとなるよしを辨じ。又後世家々の傳受秘事などいへるゝとのひがゝとふるを辨じ。又神武天皇より當時までの世のうつり

来しやうを凡は論ぜざり。嘉永四年刊行す。末は藤原真彦の跋あり。

萬葉集千歌二巻　　伊能魚彦撰

本集の中にて殊は歌ざまのよろしきを。短歌のみ千首あまりえらびとりて。六帖題は類をいかち草假字もて志るせり。歌のかしらは本書は巻數紙數を志るせり。跋はいまし年人々縣居はつどひて。萬葉集の今のふみはよみざがへうつしあやまれりとおぼしき事のさハなるを。あげつろひさだめなどしける比。そが中はひでたりとうしのことめて志るしつけられけるみしかうたどもを。こたびちふのいほりはしてたぐひをいかち書つむるついでは。いさゝかくはふるもありて十巻○正辭云。本末二巻にわかちて。其中をまた十篇にわかてり。故にこゝに十巻と云へるなり。また羣書一覽には一巻とあれどうはわろし とハなしぬ。うはがきハ數のおほよそもて。やがて千歌となん名付たりける。かゝあつめえるハ安永三のとしのやよひのすゑはなも中臣魚彦とあり。

萬葉集淺茅原二巻　　澤眞風撰

群書一覽は云。魚彦が千歌はならひて短歌を類を分ちてえらべり。巻上天象春夏秋冬禽獸方域。巻下神人之部相聞上下羇旅正述心緒一歌寄物陳思歌等。○序は此書をえらべることハ我むれの人らの擬古の歌はよみならひて。いにしへのふりをも志りてふることまゐびぬるたつきともなりなんと。萬葉の草葉えらびて摘あがてる心をもて淺茅原となんなづけぬ。みん人おのがえらびあやまれる歌の點をば。よゝ正しよく見てなほしたまひねかしとありと。同書はいへり。予いまだ此書を見ず。

撰集萬葉徴四巻　寫本　　田中道麻呂撰

此書ハ二十一代集の中に本書の歌の入たるかぎりをぬき出て。その左に行

を低て本書の歌を一々志るし。其詞其作者の異同を志らしむ。抑本書の歌の撰集ハ入たるハ。歌詞ハさらなて作者なごもいたくあらぬさまハ誤りたるが多くて。從ひがたきことのみなれど。それが中ハまれ〳〵ハ古本の訓の殘れるもあれば。一向ハすつべきハもあらず。されば此書ハよりて其是非を校べ考ふべきふしとぶり。凡此書ハ載するところの本書の歌數ハ五百八十一首。內長歌七首旋頭歌五首なり。此書上中下三卷ハ分ちて別ハ目錄一卷を附す。但し縱橫ハ格をわかちて上層ハ撰集の名を擧げ。下ハ其集々々ハ入たる歌數を志るして便覽に備へり。

萬葉集佳調上下二卷　合爲二一冊一　長瀨眞幸撰

本書の歌の中にてすがたも志らべもよくさゝのひて。古今ハごほりたるものをえり出て草假字もて志るせり。訓ハ大かた略解ハ志ゞがへり。上卷ハ短歌をあつ

め四季相聞雜東歌旅別賀ゞ分類せり。末ハ旋頭歌を載す。下卷ハ長歌をあつめて相聞雜挽歌と分てり。橘千蔭本居宣長の序。寛政五年八月の自序あり。まゝ平春海の跋あり。寛政六年刊行す。

萬葉集佳調拾遺一卷　長瀨眞幸撰

春夏秋冬別旅戀哀傷雜長歌旋頭歌東歌等ハ分てり。本居宣長の序。阿蘇君惟馨まゝ高本順の序。まゝ自からの跋あり。寛政十一年四月刊す。

萬葉集山常百首一卷　本居大平撰

本書の中より道の助けゞなるべき歌を百首えり出たるなり。歌ハ本書のまゝに漢字まて志るし旁訓を付たり。文字も訓もいさゝか改たるがあり。さて本書の卷數頁數を志るせり。此書本國人安田長穗刊行す。文政三年同人の序あり。また作者の自からの後序ありて云。此一卷を思ひよれるハ。世ハ

古こと學び教ふる學びの親はもとより遠き堺より志たひ來たらむ教子の二日三日旅居して。古書ときかせ給ひねとねぎたらむよ。萬葉集の一二の巻。或ハ古語拾遺。またハ神代正語玉鉾百首。何よけんこれよけんと思ひめぐらしもすべけれど。一つどひ二つどひのほどよ一部よみもてむことはえあるまじく。又一巻をだよよをへずで。なかばよてやまんは。のこりおぼつかなかるこちすべければ。かく一日二日はよみとき書よ。其ほどをはかりてどゝのへてはつかよ此百首をなもあつめける云々。

萬葉名所寄十巻　寫本　撰者未詳

此書前田夏蔭藏せり。長流の名寄と同じく。山城大和と國ごとけよして其國々の歌を集めたり。作者の名氏ハ志るさゞれども。略解の巻數を志るしられば。近比の人の撰と見えたり。

萬葉集類葉鈔上下二巻　村上圓方撰

本書の短歌を天時候地草木鳥獸等よ分類して。これを草假字にて記し。その歌の肩よ本書の巻數紙數を志るし。下よ作者の名を擧たり。

以上撰歌

萬葉集遠江歌考一巻　賀茂眞淵撰

本書中より遠江の名所をよこたる歌を摘出して。各注を下志たり。巻末よ此國の歌の萬葉よ入たるを書出してまいらせよゞあるよまかせて。寛保二年冬。東のみやおよてしるす眞淵著とあり。また夏目甕麿の記ありて。翁の小傳及び此原書の持主等の事を志るせり。また内山眞龍の序あり。文政三年刊す。但し自筆を其まゝよ摸刻せしよしなり。こハいとまだしきほどの考と見えて。さのゝめつらしき説もなく一わたりの事のみなり。巻の次第ハ改

めずして今本のまゝにて記志るし。

萬葉集竹取歌解一巻　　賀茂真淵撰

本書巻十六なる竹取翁の歌の解なり。文政七年刊す。巻尾に座頭麻績一の記ありて。翁の自筆本を得て校合して彫たるよし。また此書ハやゝきあたりのおほせごゝにより て。二日三日のほどにものせられしその下書なれば。いかにぞやおぼゆるふしもまゝしり。また久老がこの歌の注に翁のせちにてあげたるゝたがへる所あるよしなどいへり。岸本由豆流の序あり。

竹取翁歌解一巻　　荒木田久老撰

此書ハ賀茂真淵翁の説をあげて。自らの案を加へるものなり。

萬葉集人物履歴九巻　寫本　　撰者未詳

群書一覽に作者履歴とあれど。今の所見本に人物履歴とあるに従ふ。そハ

作者のことにもあらず本書に出でる人名をばことゝ〜く擧るればなり。又一覽に巻數を五巻とあるも今本と合はず。さて日本書紀續日本紀延喜式姓氏錄等の文を一一あげて。其人々の履歴を記せり。其次第ハ左の如し。

巻一帝王追尊帝太子廢太子皇后夫人皇子皇女　巻二諸王女王　巻三大臣朝臣　巻四朝臣眞人　巻五朝臣諸氏　巻六宿禰　巻七連公君首忌寸　巻八臣造村主使主史倉人諸姓　巻九諸臣僧女庶人

書中師説あり今案あり。まゝ引書麁雜にして甚繁冗ふり。但し未定の書とみゆ。按るに此書の作者ハ若冲なるべし。其師説ハ契冲の説ふらん。

萬葉集作者部類一巻　寫本　　撰者未詳

此書人物履歴の未定なるよりて。其體式を改め訂正を加へたるものとゝゆ。實に簡明にしてよく調へり。惜らくハ末缺て不全。余閑暇あらばその缺

を補ひ足本とせんとおもふ。書中明清按の語あり。即山本明清の作なり。又多と若冲云を引り。但し履歴の文なり。其部分ハ全く履歴に同し。その志るしざまハ。まつ其人の姓名を擧げ。其次ハ低行ハ本書中よその名の出たる巻數張數を出し。その下ハ各原文を擧たり。注ハ漢文まて上層に記せり。但し日本書紀古事記續日本紀姓氏錄等を引て證とせり。

萬葉集作者部類一巻　寫本　　源義雅撰

集中ハ載せたる作者の名氏を五十音もて分類して。其人々の傳を萬葉考と畧解とよりていさゝか志るせり。別ハ自からの考ハなし。巻末ハ文化十一年甲戌二月源美雅とあり。

萬葉集折木四考一巻　寫本　　喜多村節信撰

本書巻六ハ折木四哭。まゝ巻十ハ切木四之泣とあるハ。ともハ樗蒲子の事まて。唐土まて五木といふ遊戯を。此土まては四木を用ゐるふり。其樗蒲を和名鈔ハ樗蒲一名九采加利宇知。又擽加利擽子、樗蒲、采名也とあれば。折木四まゝ切木四ハ即四木まて雁の假字ハ借りたるものたるよしを詳らかに論志たり。但し程大昌の樗蒲經また晉書宋書唐國史補五雜俎等の書を引て。樗蒲の事を明し。その采の圖をも出して。和名鈔の一名九采とあるハ四木を用ゐたる證なるよしをも辨せり。此ハ古へより人々の心得がてよしていかなる事ども志られざりしを。かゝおもひ得たるハ千古の發明といふべし。椒齋の倭名鈔箋注ハも喜多村氏節信曰とて此說を採りのせたり。志かるを近き比刊行せし靜廬の梅園日記と云ものハ。自らの說ハしてこの事を載せたるハいかゞなり。もしもとより靜廬の說ならむハ。椒齋ふどか靜廬の名をあげざらむや。また山崎美成が博戯犀照。太田方が諺因などいふも

のまも。節信の説としてこれを出したりといへり。さらば節信の説なる事論なきをや。すべて近き世の人の著述まハ。かゝるきたなき事往々まみゆるハいとわろきならはしなり。心あらむ人ハかけてもさるひごなせそ

萬葉集上野歌解二巻　　橋本直香撰

此書上巻ハ本書十四の巻なる東歌の中より。上野、國の歌をえり出て一首の意また地理等の事を明せり。下巻ハ同巻なる未勘國歌の中より。上野、國の歌をおぼしき。またハ廿の巻なる防人の歌。其外他巻の歌をも此國のをおぼしきをばのせたりとなり。注解ハ別まに發明の説なし。たゞ名所の地理を辨へたるまハいとゝかよるべき事もあるべし。橋冬照又神保臥雲の序あり。安政六年上木す。

以上雜攷

萬葉集長歌短歌之説一巻萬時一巻寫本、合爲二一冊。　權中納言定家卿撰

巻首まに萬葉集長歌載短歌字之由事とありて。本書全部にわたりて端詞を摘錄して。短歌ハ三十一字の歌の稱なるを。古來長歌を短歌といひたりし説のひがことなることを辨ぜたり。其次まに濱成式喜撰式孫姫式清輔奥儀抄範兼童蒙抄等を引て。長歌短歌の説 古今相違の事を論じ。末まに云。竊所勘出只爲備愚蒙也。於今者誰改延喜以後稱來之説。更尋孫姫以前注置之跡。而不加私今案。只顯先賢之所存許也。貞永元年七月日黄門遺老花押とあり。この次まに古今集眞字序の古注を引て其證とせり。次まに萬葉集時代、事といふ一條ありて。本書巻十七より巻廿までまに見えたる歌の時代を擧げ。顯昭が平城天皇の勅撰なりといへる説を破り。古今集の序の誤なるよしをいへり。但しこの文をば

拾芥抄また拾穗抄等なも引たり。

徽書記物語なに云 萬時とて萬葉集の時代を定家の勘ぜられたるものあり。重寶也。爲秀自筆の本を了俊とれられしを。人のほしがられしほどないたし侍し。うつ〳〵としたるものなり。正辭云。この長歌短歌の說と本書時代の事ハ。古〳〵より人々のおもひ誤り來しことなるを。今此書なに出ぜる證據正しくして實なに從ふべき事なり。但し其文簡古なればふとハ見ゆきがたきことあれば。よく心をしづめて其說を味はふべきなり。予が藏 本の奥なに左の如き文あり。

享保十二未夏。奈良屋安左衛門所持致候定家卿眞筆長歌短歌古今相違之事と申書。公義に被召上。右代りとして黃金百枚安左衛門に被下置候。然處右書物今度冷泉中納言に被下候由。是は定家卿御

子孫之由。右なに付書簡幷中納言殿御詠歌之寫。

今度先祖定家卿眞跡之長歌古今之事一狀。以家筋爲久に拜領被仰付候御事。上意之段畏承候。誠當道之再興當家之面目。永々傳子孫。恩幸不淺奉存候段難盡筆紙候。御禮之儀可然樣御披露希存候。爲其以愚札令呈上候也。恐惶謹言。

十月十二日　　冷泉中納言　爲久

水野和泉守殿

松平左近將監殿

松平伊賀守殿

此次なに冷泉黃門の長歌を載せたり。今省く。

又近藤守重の右文故事は享保錄續編を引て云。長歌短歌古今相違之事。京極黃門定家卿自筆は被記候一帖者。冷泉家世々相傳之秘書也。然處如何してか。江府町人奈良屋安左衛門と申者。近世所持之由成島道筑承り田沼故主殿頭へ申立。右一帖之寫入御覽處。萬葉古今集等彼是御正しの後。右之本書御用は可奉哉と安左衛門へ承候處。御用と御座候へハ可差上。若御買上は相成候譯は候ハヽ不本望旨申之故。享保十一年十二月十三日御用に被召上候。依之爲御褒美白銀廿枚も被下置可然哉との評議之上。有馬兵庫頭加納遠江守御用御取次御側なり被及伺候處。御褒美と有之者銀廿枚ハいかゞ。大名等へ被下るも廿枚ハ不輕事歟。奈良屋へ被下候にハ銀二枚はても過分之樣は被思召候へ共。先銀二枚可遣。さて此一帖之事黃金百枚之

極有之天下之寶に候へハ。聊も是を違べからず。如極黃金百枚別は可遣旨仰有之て。其後安左衛門へ件之御褒美并極之黃金百枚被下置旨申渡候處。安左衛門畏入家藏之古書御用は奉る事所本望而已。御褒美迄頂戴仕冥加は叶難有仕合。併最初よりも申上候通り御買上は相成候ては本望ならず候へハ。右黃金百枚ハ頂戴仕間敷。金の儀者不珍候條。此上家の規模は御目見被仰付被下候ハヽ本懷の段相願候は付。後日件の次第入御聽處。御用達町人並は相成。追て御目見被仰付候。將又翌年傳奏衆此節中山中納言など傳奏なり。外公家衆も參向の處。以高家右は一帖御見せ被遊候處。無類の正書不可有疑と各被感言上。其後禁裏へ奏聞の上。享保十二年九月中旬冷泉中納言爲久卿へ被遣之。再冷泉家藏は被成候云々。右の古書再冷泉家藏は

成候事。於禁裏叡慮不浅これ御事女房奉書到來。彼是事濟更ま奈良屋を可召出命有て。此度件れ次第於禁裏も叡感の御事ふど上にも御悦思召候。依之黄金百枚被下置の段申渡。黄金百枚奈良屋頂戴之せり云々

萬葉時代難事一巻　寫本

巻首ま顯昭陳の三字を題し。次行ま道因勝命等所勘撰萬葉集時代條々難事とあり。又集中條目あり。一平城天子事一時更十代事。一大同年中撰事。○正辭云。此條に本書部類の事書樣の事歌數の事。また本書に漏たる古歌の事作者位署不定の事等を論せり。一人麻呂在世事等なり。巻末記ま云。此一帖爲子孫書寫之。寶德元年三月日菅原朝臣爲賢。花押　また朱書ありて云。元祿戊寅之夏以契沖藏書一校合了。おの原本ハ水戸彰考館の本なるを。予幸ひま謄寫する

事を得てこれを藏す。此書のおもむき大旨古今集の序まよりて。本書撰集の時代を難陳しるるものまて。もこ彼序ハ世間普通の謬說によりてかゝれるもれふる事を。互ま曉らずして論ぶたれば强說甚多し。其中道因勝命ハ本書をば聖武天皇の勅撰なりといへり。此ハ少しく據なきましもあらねど。彼序れ平城天子をやがて聖武天皇を指奉るなりといへるハいみじき誤なり。また顯昭がこれをば大同帝を指奉るなりといへるハさることながら。本書をやがて此帝れ勅撰と志るるハまさいみじき誤なり。其他尚互ま强說多し。

萬葉枕詞上下二巻　寫本　撰者未詳

これ書温故堂れ藏本まて古鈔本二冊あり。萬葉集古今集等ま出るる枕詞ども れ舊說を集めてをり〳〵今按を加へたり。引用の書ハ基俊無底

抄、俊頼無名抄。清輔奥義抄。顯昭袖中抄。仙覺萬葉集註釋。由阿詞林采葉。光俊今物語。兼良公歌林良材集。定家卿拾遺愚草。萬葉目安。釋日本紀。八雲御抄。綺語抄。範兼童蒙抄。色葉和難集等なり。さてこハ何時のものなるよか上巻天降就の條に下河邊長流の萬葉集名寄を引たれば。長流より後ゐ人なる事ハ論なし。また釋紀と萬葉の仙覺抄ハ板本よりて引たりと見えて。誤字脱字など板本のまゝなり。これまたこれらの板本の出來しより後なる事ゑるし。かくて契冲真淵等の説ハ一つも載ざれば。此人々より前なる事また知るべし。抑代匠記の枕詞、釋真淵の冠辭考等よりもはやくこの擧のありしハいとめてたき事なり。且古説をこゝ〳〵に引て一つにあつめたれば。古人の説を窺ひ知るよいと便利なり。書中風土記の文を多く載たり。されど多くハ釋紀と仙覺抄とよりて引たるものゝゆゑ。まゝ或説云一書云一説云として載たるよ。國名風土記の文とゝゆるがあり。但し其文板本の國名風土記とハ大同小異なり。

初學萬葉梯一巻

賀茂真淵撰

此書ハ歌のよみかたをゝしゑるものよて。萬葉集の歌と後の撰集の歌との論を擧げ。その因よ萬葉ハ古き世の歌どのゝおもひなるハひがことよて。此集よりて古ゝの道をうかゞひしるべき事をゝゝせり。巻尾よ明和二年七月十六日よ賀茂真淵ゑるしぬゝとあり。寛政十年三月荒木田久老の序あり。

萬葉諸説二巻　寫本

予見るゝところの本上下二冊よわかてり。紙ハ大はゞの雁皮よて上巻八十七葉。下巻八十五葉あり。行數ハ半葉二十行つゝよて。行ごゝよ五十字ば

かりありていと細書なり。書中は師云冲云宣云などいへるがおほくあり。師云は賀茂〻翁。冲云は契冲師。宣云は宣長の案なり。此外稻掛大平荷田御風荒木田久老田中道麿等の説あり。其誰云ともなきは跋文よりすべて契冲師の説とみえたり。但しこは宣長翁ゑ書入本より後人の摘錄したるものなり。説は皆代匠記萬葉考等は見えたるこゝまて別はめづらしき事なし。其書のやう本書の句を一二句づゝ切出して其下は注を志るしたり。注中は首書云付紙云などゝこゝろわりたるところもあり。巻尾は以下禁御本〻奥書也と標して略解は載るる別本の奥書といふものを出し。この事は上巻官本の條さくはし。その末は已上寫本奥書記之二反校了。假名再校了。天平勝寶五年左大臣橘諸兄撰萬葉集云々。又云應長元年ヨリ以下ノ奥書御本無之。元祿二年巳巳四月十九日校讐了。密乗末資契冲とあ

り。又表紙の背は付紙と標して。右萬葉集廿巻。以景山堀先生家藏本校正之。至如冠注旁注亦皆據其本已。此本也先生所自校正。蓋以契冲先師代匠記爲據。如其稱師云則今井似閑翁之説也。翁亦契冲之門人也。先生與似閑之門人樋口老人宗武友善。是故先生以其本校正訓點。冠注旁注之則實契冲傳説之義。不待代匠記而明焉者也。故予深崇信之。以餘力寫之。藏巾笥爲秘珍矣。後之閲者勿忽諸爾。寶暦七年丁丑五月九日。卒業于平安室坊寓居。神風伊勢意須比飯高葬庵本居宣長謹とあり。又この次は斯書我本居先生所藏之萬葉集二十巻之書入也。長秋適從先坐之門臨膳寫焉。命曰萬葉集諸説。通計二十巻。從寛政三年辛亥十月廿八日濺筆于勢州松阪寓居。迨同年十二月念八日卒業。門人肥后國山鹿縣久原

郷一目宮神主従五位下虬足下總守清原真人長秋記とあり。
書中に師云とあるハ。本居の跋文に據れば似閑の説の如し。然ども其説
を見るに多くハ真淵の説なり。故に上文に之を真淵の説と決ていへり。後に
石田千穎より本居大平に此事を問ひたりしなりの大平の答といふを得た
るに。書中に師説といふハ堀景山の説なり。景山ハ故翁の儒學の師なり。
此景山に所藏の契沖に説書入に本を。故翁若年の時京までかりて書入
られたるなり。さて又縣居大人の説を。故翁の書入られたるに。師云とあ
り。これハあまたあり。右の事心得ぬ人ハまぎれ候なり。縣居大人の説も其さ
まにて見かるなり。師説と云もに。一向古學あさはかなる人に説まで。とる
またらぬことのみなり。但し大平が藏本に。師説と云ものハそのまゝまて
縣居大人の説をば。岡部翁云とかき。鈴屋翁の説を師云とかきたり云々と

あり。かゝれば其を寫しとる人々の心々まて。其稱謂を少しづゝ改めさるも
のとこゆ

萬葉集玉に小琴二巻

本居宣長撰

此本堀直孫子活字印行す。凡例云。此書已ガモタル書ニ寫誤リ少
ナカラサレバ異書モテ校合セリ。皆歌毎ノ題ナシルシ丁數ヲ分
注ニシテ。又歌ノ初句ヲ揚テ云々トイヒ夫ヨリ注スベキ本文ヲ揚
テ説セリ。ソヲ改ムベキニアラヲ活字ノワヅラハシク紙數ノ多
カラムコトヲ厭ヒテ。題ハ略キ初句ノ分注ニ丁數ヲ載ツ。○本書
一巻アリテ追考又一巻アリ。ソヲコタビ一ノ巻ハ一ノ巻ノ其所々
ニ割入タリ。追考ト云フハ分注ニセリ。四ノ巻ハ追考ノミナレバ
初ノ分注ニアゲテ下ハ略ケリ。○本書傍ニ假字ヲ付テカク訓ベ

シト有ルハ。本文ヲアゲ其下ニ傍ノ假字ヲナシルス。ユメ本書ヲ改タルニ非ズ活字ノ僻ナレバセムスベナシ。○本書凡テ一例ノ書ザマナラズ。今改ムベキニアラザレバ本ノ儘ニ從ヒツ。ザレモ今片假名ニ改シハ活字ノ僻ナリ。以上天保九年齋藤彦麿社序藤原秀英の跋あり。此書集中社句を一二句づゝ切出して分注ヨ本書社張數を志るし。其下ヨ引つゞけて注を記せり。本書巻一より巻四まで社注なり。但し萬葉考の説社ヨろきさころを正したるなり。上巻社尾ヨ云右一二社巻の中ヨ考社説のよろしからぬ事ハ猶これかれあれども。おのれもいまだ思得ぬことハ皆漏しつ。今より後又考得たらむまゝ〜書つぎてん。又下巻の首ヨ云。一二社巻ハ師の考有て世ヨ廣まれゝばいと明かなり。三の巻より下つかたハ其書いまだ出ねば。世の人師の説を志らず。おのれはた千里をへだてゝ在しかば。こゝ〜ヨハ得きゝ明らめずでやこヨき。されど文もて廿巻みながら二かへりまで疑はしきことゞも問聞つれば。今其趣をあげてわろきハヨろしとことわり。又聞もらしつる事ともハおれが考を出しぬ。其が中ヨも早く師の云れつる事も必ありなめど。知らぬをばいかゞハせむ。以上文さて書中ヨいへる事どもまれヨハヨろき事もまじれども。さすがヨよき事多くして。瑕の瑜を掩はざるが如し。中ヨも義之を晉の王義之がことまてテシの假字ヨ借りさるなりといへるハ。千古の發明ヨして動くまじき説なり。たゞ文字を妄りに改めたるがあるハ。大かたハ非ヨして從ふべからず。此事ハ余別ヨ論じおけるものあり。往見すべし。

萬葉集問目七巻 寫本

本居宣長問
賀茂眞淵答

巻ごとの首ヨ萬葉第幾と標し。次行の下つかたヨ本居宣長問。賀茂眞淵

答とあり。巻一ハ本書巻一より巻四に至る。巻二ハ同じく再問也。巻三ハ本書巻八。巻四ハ本書巻九。巻五ハ本書巻十二。巻六ハ本書巻十三。巻七ハ本書巻十四の問答なり。各〻本書中の難義を抄出して。先今案を擧て師の説を問たる也。此書本居の問ハ墨にてものして。真淵の答ハ朱にてかけり。巻一の尾に賀茂真淵判」之。巻三巻四巻五巻六巻七の尾に本居宣長謹問とあり。また巻三の末に真淵翁著書の事。巻五の末に雜問と標して。天地(アメツチ)の訓の問答あり。また巻六の末に賀茂の大人の御まへにのみ申す詞宣長云々とあるし。巻七の末に此巻ハ○正解云此巻とハ本書巻十四をいふなり。に解がたきを年經て凡ハ得たるをのこさずいへり。よく見給へ。凡今京以來此巻を解得たる人ハあらじ。よりて猶おもへたがへる事も多かりなん。年經ておもひ定め給へ。真淵とあり。こハさすがに古學の祖ともいはるゝ兩大人の問

答として世のかひなての書の類ひにあらずかつ本居の師を尊める事うみの親のごとく。縣居の本居ををしふる事ひが子のごとくまて。なみ〳〵ならぬ人がらの見えていとめでたし。

萬葉集問聞抄三巻。寫本

田中道麻呂問
本居宣長答

巻毎の首に萬葉問聞抄と題して。次行の下つかたに田中道麻呂問。本居宣長答とあるぜり。本書巻三より巻二十に至るまで。巻々のうちの難義を揭ゲ出して。人々の説まゝハ道麻呂の今案を志るして。その是非を本居に問さるゝ。やがて本居の答さるをぢ〳〵をあつめて一書とせたり。略解に或人云とあるを。此書によりて見るに道麻呂の説ふるものあり。其説ども今ハ大かためづらしげなきことゞもなれど。當時いまだ本書の注解の書乏しくして。此學のよくも開けざりしほどにハいかばかりの勞なりけむとそたおもひや

319564

らるゝかし。かく本書はゐたつきたりし人の名を。略解はあらはさずして或人云としもかゝれたるハいと口をし。此書は一二の巻の問答のなきハ當時もやく萬葉考のなれりしが故なるべし。奥書は云此上中下三巻ハ和陽の田中道麻呂の翁が年頃これかれとたゞらべ考へて。また鈴の屋の翁へ問る聞書を小林義兄がもとへ道麻呂贈りけるを。橋本經亮ぬしの寫せるをふたゝびわれもうつせるなり。時は寛政の九年といふさしの彌生のもち。かくいふハこゝのみたみ澤眞風とあり。

萬葉集緊要二巻　　橋守部撰

此書ハ古風の歌よまむ人のためにつくれるものにて。集中の歌の詞のよさあしさ。又ハつゝけがら志らべなどの事を論ぜたるなり。凡例は古〻の歌と後の歌とのけぢめを辨じたり。按は緊要の名ハあまりはこと〳〵しくて此書は

ハ似つかはしからず。但し自からの序はもしかいへりき。天保十三年越の關崎蛙麿の序。橘冬照の跋文あり。

以上雜說

萬葉集書目提要下巻

萬葉集書目提要下巻附錄

余昔(サキ)は著せる萬葉集書目の附錄は。書目のみものは見えて其提要の知かたきものを集めおきたり。しかるは後は其書を得たるものあり。また其書は得ぬものから。これかれものは見えて。大かたは提要の知られたるもあれは。今かつ〳〵志るして同好は示す。

木村正辭識

萬葉集書目提要下卷附錄

木村正辭著

萬葉五卷抄

清水濱臣遊京漫錄に云。三品氏豐之進。西洞院丸太町下ル所ニ住ス。云。貫之五卷抄。今南都西大寺にあり。外題に萬葉抄とあり。建仁年中鎌倉より寫しとれるよしのおく書あり。合卷一冊にてやまとことちなり。萬葉十八十九二十の歌に點つけたるのみふりとぞ。

正辭云貫之五卷抄の文。顯昭袖中抄におほく引用ぬたり同物にや。又同書卷五に其序を引載たり。其文をば別に訂正して萬葉集古注遺文に載せたればこゝにはぶきつ。

萬葉集抄

代匠記首巻今井似閑書入ゟ云。木瀬三之（○正辭按山城國山科人。語予曰延喜御子前中書王萬葉集之抄ありといへども。今世ゟつたはらず云々。○摂州大坂の住若冲云。長流曰二十巻有て所持。又顯昭之抄物二十巻あり所持ゟ云々。

正辭云。此説いと疑はし。また顯昭の萬葉の抄といふものも絶て聞ざるものなり。もしくハ袖中抄のことまてハあらざるが。二十巻といへるも袖中抄ゟ合へり。猶考ふべし。

敦隆類聚萬葉集

八雲御抄巻一ゟ云。類聚古集廿巻敦隆抄。拾穂抄ゟ云。先師道遊軒貞徳云々予ゟいひけらく。彼御堂殿の上東門院へまゐらせられし。假名の萬葉集見出る事ありやと。多年心ゟかけたりといへどいまだ見出ず。ゟづかゟ

敦隆の類聚萬葉を得たり。此書萬葉のうたを假名ゟ書て。真名をかたそらゟ書そへられし云々。

正辭按。袖中抄巻一（廿二右）ゟ云敦隆の類聚古集。巻二（廿二左）ゟ云敦隆之類聚萬葉。巻十五（廿六右）ゟ云類聚古集。同（廿九右）ゟ云敦隆部類。巻廿（五左）ゟ云。敦隆か部類古集とみえたる皆同物ゟて。類聚萬葉の事なるべし。さてこれゟよるゟ次ゟあぐる部類萬葉も同物なるべくおぼゆ。又顯昭陳狀ゟも此書を引たり。

部類萬葉

明月記ゟ曰。寛喜二年七月十四日自殿下給部類萬葉集二帖。（蓮花王院御物傳第一第二季時入道書之。）可書寫進者。自春手腫之後彌不能執筆。但給置可書試之由申之云々。○同月廿七日朝校止觀已後書

部類萬葉集。第二帖。今日申時訖之。

萬葉集目錄　藤原敦隆撰

此書今傳もらず。釋顯昭が柿本人麿朝臣人麻呂勘文ゑ云。萬葉集目錄云藤敦隆撰柿本人麿撿國史無所見。又云萬葉目錄云柿本人麿朝臣人麿歌入八十三首。此外家集中出之歌三百余首云々。」こゝゑ引たるゑよりて考ふれば。作者の傳と本集ゑ入たる人々の歌の數とを志るせるものゝ見ゆ。其體藤原仲實の古今集目錄のごとくふりけむとぞおぼゆる。

萬葉集抄　藤原盛方朝臣撰

萬代集第十八ゑ云。藤原盛方朝臣かきおける萬葉集の抄を借て侍りけるを。身まかりて後跡ゑ返しつかはすとて。平忠度朝臣

有し世ハ思はさりけんかきおきてこれをかたみと人志のへとハ

かへし　藤原盛方朝臣妻

見ても猶袖そぬれぬるなき人のかたみと志のふ水くきの跡

萬葉新註釋十卷　釋仙覺撰

友人鈴木眞香がもたる鈔本の書目ゑ。萬葉新注釋十卷仙覺とあり。此書目ハ何人のかけるゑか撰者を著さねば。今考ふべきよしなけれど。其書のさまを見るゑ虛たる事のみゑハあらざりげなれば。今これゑよりて出しおくなり。此書の事ハ上卷の附錄訓のさたの條ゑ。かつ〳〵云とつれば。合せ見るへし。

萬葉集抄百卷　釋由阿撰

代匠記首卷似閑書入ゑ云。木瀨三之曰。藤澤由阿萬葉集抄百卷。江州彦根家中園村半之亟所持ゑて。三之繙之云々。惜哉他ゑある事

なし。

正辭云今も園村氏は藏せりや。尋ぬべきことなり。

青葉丹花抄一巻　釋由阿撰

本書巻一より巻二十までを。巻の次第を逐て長歌短歌の内二百八十首（奥はかくあり。但こゝ今かぞふるに二百七十首ばかりなり。八は七の誤りなるか。）をぬき出て草假字もて志るし。（長歌いそのの注すべき句のみを摘出ふたり。）その左は歌の意又ハ言の義ふどをいさゝか注し。或ハたゞは旁注としたるもあり。又歌のみあげて旁注も何もすべてなきものもあり。こハ後はうつせる人の旁注を脱したるなるべし。但し皆先達の説を略抄したるのみまて別は發明ハなし。訓も今本の訓とかはる事なし。さて今見るところの本ハ温故堂所藏の新寫本にて。半葉十行づゝまかけるが。紙數三十五葉の小冊子なり。奥書は云。應安七年金商之比。清撰萬葉集廿軸之要謂名曰青葉丹花抄。此集者巻之數綿繡。歌之鏤金玉。是則和歌之骨目。○按恐肉字。數寄之明鏡也。而今下僕及窮老蒙昧之期。不可□握翰。○按空位當堪字。翰恐幹訛。者殆。○恐歟字。年○恐手字。疼眼翳。稟性難彫。闇神靡瑳者字。○恐乎字。然而依有一路之貴命。不編再會之面拜。粗訖。○恐記字。之訖。深納篋之底。暮○恐莫字。出閼○恐闔字。之外而已。

藤澤山陰侶桑門由阿　在判

春秋八十四老手寫書畢

萬葉集佳詞一巻

集中詞つかひの佳なるものを。巻の一より巻の次は隨て。三句四句或ハ一二句を摘出して。ところ〳〵は其旁らまたハその詞の下は細字まていさゝか言の注を志るしたり。別は發明したることハふし。跋文はよるは注ハもと朱

まてかきたるよしなり。又詞の濁りをことゝ〳〵く朱もて点るし。をり〳〵詞の上り下りをもつけたり。名所をよみ合せたるハ。其詞の肩ハ國名を点るせり。跋文云。寫本云祖父入道大納言（爲家卿）自筆本所被書寫也。但佳詞之注等。於本者以朱被書付之。而今熊以墨注之云々爲後代誡爲宜而已。左兵衛督藤原朝臣爲秀判

又云享徳二年初春上旬之頃書寫之。於本者雖以片假名注之。依所望以假名書付之畢。

桑門圓雅

正辭云今見るところのものハ。元龜天正頃の寫本なり。幕臣勝田大五郎元徳の藏まて。紙數すべて三十紙ありて。半ひら十三行にかけり。又按ハ爲家卿ハ仁治二年任權大納言。爲秀卿ハ延文五年任參議。貞治五年任權中納言給へり。

萬葉集書目提要下卷附錄

萬葉集書目提要下巻追加

余いまし慶應二年。萬葉集書目提要をものしたりしま。其後見聞せし書もおれかれ出來またれば。其書の提要をもおろ〳〵記しおきつるを。今ここに追加として出しぬ。さて土佐人鹿持雅澄の著せる。萬葉集古義といふものも百巻ありといふを。宮内省まて此頃刻し給ひて。世ま公々まし給へれど。おのれいまだよくも見さればこそまハ出さず。後日熟讀して其提要をもものすべくなん。

明治二十年八月

木村正辭

しるす

萬葉集書目提要下卷追加

木村正辭著

植山拾葉七巻目錄一巻

撰人の名氏ふし。地名をよめる歌を分類して。肩ゐ本書の巻數を志るし。歌の下ゐ作者の名を志るせり。地名ハいろはの次第をもて順序し。其下ゐ國名郡名を志るし。次行ゐ歌をならべ出せり。但し長歌ハ全歌を引ず。其句のこを出したり。また古來異同ある歌ハ。その異本のかたをも更ゐ出せり。たとへば巻一ゐ伊駒と標し。矢駒(イコマヤマ)山木立もみえず云々の歌を出し。左ゐ右矢駒山駒字。證本釣(ツリ)字ニ作り。やつりやまと點せり。仍又別載之と注し。や部ゐ。矢釣(ツリ)山云々と載せ。また射狹庭(イサヽニハノヲカ)崗と題して。注ゐ崗字或本山岡ニ字に作り。やまをかと點せり。仍又別載之と志るし。次にいよのたかねの。い

さまハのをかまたゝして云々と志るし。さてや部まで。山岡と標したるが如し。其他證本或本の異同を志るせり。目錄のかたハ國分まて順序せり。地名まあらぬものをも。誤りて地名としたるもこれかれみゆ。書中ハ雲御抄仙覺抄等を引り。又地名標目の下まで。日本紀延喜式續日本紀風土記等を引て。文字の異同ををり〳〵志るせり。すべていと志とけなきものまて。採べき事稀なり。但し證本或本の異同を載たるまハ。いさゝか考證まなるべきこゝハあるべし。此書大學校まで新寫本あり。但し代匠記首卷似閑書入類葉抄の條まいへるおもむきまてハ。印本あるよしなり。余いまだ印本を見す。

萬葉集名物考三卷　寫本

釋春登撰

草木鳥獸蟲魚をよめる歌をおと〳〵と摘出して。注まで古事記日本書紀延喜式倭名抄等を引て考證とし。をり〳〵古人の說をあげたり。別まで發明志たることハなし。其上卷ハ草部まて通計九十三種。中卷ハ木部まて五十八種。下卷ハ鳥部三十八種。獸部九種。蟲部十種。魚部十八種あり。自序及び總目あり。

萬葉類聚地名考五卷　寫本。小本二冊

泊瀨島麿撰

島麻呂ハ豐後佐伯の人なり。集中まで出たる地名を盡と摘錄して。五十音の次第まで分ち。略注を加へたり。注の後まで其地名志出たる卷第幾と張數とを書るせり。但し卷志次第ハ萬葉考志說に據りたるよし凡例まいへり。注まで字志曰とあるハ縣居翁志說なり。別まで發明志說ハふし。同じ國人布勢ノ兄國志序。又自ら志跋ありて。共まで自筆ふるべく見えたり。もし志からば是本作者志原本なり。今所見の本。文字甚細小まかけり。黑川眞頼藏す。

奈良山一葉

未見。作者亦詳ならず。萬葉類聚地名考に布勢、兄國(エクニ)か序あり。過し代萬葉に地名を集し書あり。奈良山一葉と名づく。今は梓に朽たるか。世に稀なりしもある云々といへり。

萬葉類葉集二巻　　石津亮澄撰

板本にて小本二冊あり。短歌一部を類題に志たり。亮澄は文化文政間に人なりといふ。

萬葉長歌類林十巻　　片岡寛光撰

萬葉集に長歌をおとゝ〳〵あげて。古今六帖に體裁まねかち。長歌よまむ人にたよりまをせられし書なりといふ。○此は天野政徳が著せる草緣集、巻末に附したる書林伊勢屋忠衛門藏板目錄に見えたり。余いまだ此書を見ず。

萬葉謌六帖二巻　寫本　　撰者未詳

集中の短歌をおとゝ〳〵に草假字にかきあらためて。古今六帖の體にならひて分類したり。訓は舊訓のまゝにもあらず。また略解ともことなるところあり。上層に本書の巻附に紙數をしるせり。

萬葉古調梯一巻

横山由清云。小本の刊本なり此書先年一覽す。撰人の名氏を忘れたり。萬葉の詞を二句づゝ抜出て。天文地理など十二門にわかち。又題ふどにもあてゝよむたよりにしたる書なり。

萬葉集墨繩總論一巻　寫本　　橘守部撰

此書は本書に要とある事を條目を立て。先輩の說どもを出してその末に辨論を加へたり。其條目左の如し○萬葉是古學、要○題號○撰者

附時代 ○本文 ○部類 ○目錄 ○端詞 ○左註 附細注 ○巻、次第 ○古訓 新訓 ○異本 ○古鈔等也。この末は仙覺抄代匠記萬葉類林萬葉履歷萬葉考玉、小琴槻、落葉畧解等の事を論じたり。

假名萬葉集十巻 寫本

撰人の名を著さず。また序跋なし。此書本集の歌 また端書左注は至るまで。ことゝ〳〵く後世の歌集の如く草假字まじりはかきて。別は漢字歌を出さず。短謌旋頭歌長歌を各部はかてり。或本歌一云等の句をば。本行のかたはらはかきそへたり。毎巻の首ゞは假名萬葉集巻之幾と志るし。次は歌數を擧げ。さて正文の首ゞは萬葉集巻第幾と志るし。本集巻一より巻廿までの歌を。各、巻の次のまゝは出したり。巻一より巻六は至るまで短歌の部。巻七のはじめは旋頭歌を擧げ。その末より巻十に至りて長歌を載たり。こハかの仙覺が奥書は見えたる。御堂殿の上東門院へ奉り給ひし假名の萬葉はやと。いとゆかしくて見もてゆくは。その訓こと〳〵く今の板本とことなることなく。古訓はよらずして皆仙覺が新點を用ゐたり。これはよるは後人の仙覺本はよりてものしたるものなることうづなし。但し今見るとおりの本ハ。澁書皮の美濃紙本はて。凡三百年ばかりあなたのものとみゆ。いかはもあれめつらしきものなり。その巻首は志るせる目錄を左は擧ゞ。

假名萬葉集巻之一

短歌一

本巻一。雜歌五十二首○本巻二。相聞四十七首。挽歌五十四首

○本巻三。雜歌百二十五首。譬喩二十五首。挽歌四十二首○本

巻四。相聞二百九十二首

都六百三十七首

假名萬葉集卷之二

短歌二

本卷五。雜歌七十九首〇本卷六。雜歌八十四首〇本卷七。雜歌二百三首。譬喩百七首。挽歌十四首〇本卷八。春雜二十七首。春相聞十四首。夏雜三十三首。夏相聞九首。秋雜九十首。秋相聞二十八首。冬雜十九首。冬相聞九首。

都七百十六首

假名萬葉集卷之三

短歌三

本卷九。雜歌七十七首。相聞十七首。挽歌五首〇本卷十。春雜七十六首。春相聞四十七首。夏雜四十首。夏相聞十七首。秋雜二百三十八首。秋相聞七十首。冬雜二十一首。冬相聞十八首

都六百二十三首

假名萬葉集卷之四

短歌四

本卷十一。古今相聞往來上四百七十三首〇本卷十二。古今相聞往來下三百七十九首

都八百五十二首

假名萬葉集卷之五

短歌五

本卷十三。短歌無〇本卷十四。東歌二百三十首〇本卷十五。雜

歌百九十一首○本卷十六。有由緣雜歌八十九首

都五百一首

假名萬葉集卷之六

短歌六

本卷十七。雜歌九十八首○本卷十八。雜歌七十四首○本卷十九。雜歌百首○本卷二十。雜歌二百八首

都四百八拾首

假名萬葉集卷之七

旋頭歌

本卷七。二十六首○本卷八。三首○本卷九。一首○本卷十。四首○本卷十一。十七首○本卷十三。一首○本卷十五。三首○本卷十七。一首

都五十六首

長歌一

本卷一。長歌十六首。反歌十首○本卷二。長歌十九首。反歌二十八首○本卷三。長歌二十三首。反歌三十二首。○本卷四。長歌七首。反歌十首。

都長歌六十五首。反歌八十首。

假名萬葉集卷之八

長歌二

本卷五。長歌十首。反歌二十五首○本卷六。長歌二十七首。反歌四十九首○本卷八。長歌六首。反歌七首○本卷九。長歌二十二

首。反歌二十六首〇本卷十。歌三首。反歌四首。
都長歌七十八首。反歌百十一首。

假名萬葉集卷之九

長歌三

本卷十三。長歌六十七首。反歌五十七首。〇本卷十五。長歌五首。反歌九首〇本卷十六。長歌十一首。反歌四十首〇本卷十七。長歌十四首。反歌二十九首

都長歌九十七首。反歌百三十五首。

假名萬葉集卷之十

長歌四

本卷十八。長歌十首。反歌二十三首。〇本卷十九。長歌二十三首。

反歌三十一首〇本卷二十。長歌六首。反歌九首。
都長歌三十九首。反歌六十三首
短歌三千八百九首。旋頭歌五十六首。長歌二百七十九首。反歌
三百八十九首。
都四千五百三十三首

萬葉集書目提要下卷追加

萬葉集書目提要正誤

●印ハ誤
○印ハ正

○上巻

	誤	正
六ノ二行	奥書○	○ハ云
十六ノ三行	此日	比
二十二ノ六行	「如此	「ハ」
二十四ノ八行	有異説ニ	ニハ一
二十六ノ三行	此本者	者
三十三ノ一行	困ル	因
三十六ノ九行	靈本	零
四十三ノ二行	攻文	攷
六十ノ十行	萬葉集	切
六十八ノ一行	ミナカラ	ガ

○上巻附錄

	誤	正
三ノ四行	仙洞ニ	左ノニハ一
同九行	不レ辨	反點ヲ脫ス
五ノ十行	たゝび	ひ
六ノ九行	新	此新
十三ノ一行	采葉集	抄
同八行	證木	本
十八ノ九行	袖中抄	上ニ○ヲ脫ス
二十二ノ六行	童蒙抄	上ニ範兼和歌ノ四字ヲ脫ス
○下巻		
二ノ二行	まつ	な

六ノ四行	萬萬葉	萬衍
八ノ四行	高山渡（カクヤマハ）	波。
十八ノ二行	以上	衍
十九ノ五行 九行	精撰	清。
二十三ノ八行	問ひ	問。
二十五ノ一行	かふべし	し下ニなどノ二字ヲ脫ス
三十九ノ五行	たたに	さ。
四十四ノ四行	こゝとかし	こゝさかしこ。
五十一ノ八行	初なで	ま。
六十六ノ七行	のゝ	衍
六十九ノ十一行	くわしぐ	くはしく。
七十ノ八行	をよびて	お。
七十七ノ十行	本國	木。
七十九ノ七行	まいらせ	いゝ儀ニ。ヲ置ベシ
八十一ノ十行	髓式	體。
八十二ノ六行	義雅	美。
八十三ノ十一行	方か	かゝ。
八十七ノ三行	誠當	誠。
八十九ノ八行	中納言	大。
九十九ノ十行	萬葉集問目	昂行ニスベシ
二百ノ一行	ざずして	さ。
○下卷附錄		
二ノ六行	ざるか	か。
四ノ四行	國史ヲ	國史ヲ
七ノ一行	之鏤レ	之鏤レ

明治二十一年八月十四日印刷
仝　年八月十七日出版

著者　東京府平民　木村正辭　東京北豐島郡坂本村三十二番地

印刷兼發行者　兵庫縣士族　魚住長胤　東京日本橋區本石町一丁目一番地寄留

發行所　東京日本橋區本石町一丁目一番地　大八洲學會

（東京常盤橋外常盤橋活版所印刷）

櫟齋木村正辭著書目錄

萬葉集文字辨證二卷

萬葉集訓義辨證二卷

萬葉集字音辨證二卷

右の三書は文字の體の常と異なるもの訓義の疑はしきもの字音の今音と異なるものを集中より盡く摘出して字體字義字音を倭漢の書よ徵して辨明したるものなり

萬葉集昆乙一卷

此書は集中東歌の語のうちよて常の語と異なるものと又常の語と同じきものとを比較して其用ゐたる文字の音のことを論じたるものなり

萬葉集攷文七卷

諸の古本及版本どもよつきて本集の本文の異同を盡く出し其是非を論辨したるものなり但此書は全部漢文よて記す

萬葉集略解補正 卷數未定

此書は略解を讀む人の爲よものしたるよて其注またい引書などの誤を補ひ正したるなり

萬葉集證注六十卷　未終稿

此書は本集すべての注解なり

萬葉集讀例一卷

此書い本集の文字づかひよつきてかの春登の用字格よ出したる外よも猶さま〳〵の法あることを集中の例をひとつよ集めてこゝとかしこと對照して曉るべくものしたるなり

萬葉集書目一卷　已刻

本集の諸の古本及版本またありとある本集の注釋書を現在のものはさらなり今傳はらざるものよても古書中よ其書目の見えたるものは盡く出せり

萬葉集書目提要二卷附錄二卷　刻成

右の書目よ載たる書の提要を詳かよ去るしたるものなり附錄よは本集の訓點の事撰者の事歌數の事仙覺校正本の事等を去るせり

萬葉集古注遺文一卷

本集の古本どもよ載たる裏書の文を鈔出して集めたるものなり

萬葉集古注日本紀年紀攷一卷

本集に引たる日本紀の年紀または日の支干等今の日本書紀と合さるものあるは古本の日本紀なるべきよしを辨論去たるものなり

刻本萬葉集復舊一卷

今の整版の萬葉集は活字附訓本を覆刻去たるものよて其覆刻のをり誤たるもの少からず故よ活字附訓本よりて一々よ正したるなり

萬葉集雜攷二卷

本集中の名物又は難語等を解釋去たるなり

以上萬葉類以下雜著

觀齋雜攷六卷　内二卷近刻

日本書紀異本考一卷附錄一卷

遊仙窟考證一卷

年紀異同考一卷

此書は六化より大寶よ至るまての年號年次の異說の諸の古本よ見えたるを撰出して史學家の一助とす

採輯諸國風土記補遺一卷

狩谷望之翁の採輯諸國風土記の補遺なり

皇朝造字攷一卷

此書は古、皇國よて製造去たる文字を集めて一々其出典を記し偏旁を以て部分け去たるものなり

借字纂　一　卷

此書は皇國の古書中より同音の文字を借りて某々の字の意より用ゐたるものを集めたるなり

字訓轉格　一　卷

此書は文字の訓を轉じて假借ゑたるものを集めたるなり

金光明最勝王經音義攷證　一卷

此音義は承暦年中の古寫本よて經文の文字の音訓を其假字もて記せるものなり今其音訓の攷證を漢文よて記せり

本草和名刊誤　一卷

本草和名は寛政年中劉桂山楓山文庫の本を以て刊行ゑたるものなるを刊刻の際誤たるもの又は妄より改易したる文字のいとおほかるを其楓山の原本より就て一一校正したるなり

音韻雜攷　一　卷

未定假字辨　一卷

此書は先哲の確定せざりし假字どもの論説なり

日本國號攷　一卷　已刻

此書は本居宣長伴信友両論の考の足らざるを補ひ正して日本といふ號の起れるゆゑよしを詳より辨じたるものなり

賜暇遊覽　一　卷　已刻

此書は小中村氏と共より山城大和攝津河内等の國々を巡覽ゑたるをりの筆記なり

觀齋歌集　四　卷

これは自らの歌文章長歌等を集めたるなり

觀齋別集　一　卷

これは自著のもの、序文または文字の訓義の考へ等を漢文よて記せるなり

干祿字書攷　一　卷

唐顔眞卿の干祿字書より就ての諸説を集めたり

玉篇攷　一　卷

此書は梁顧野王の玉篇の眞本の攷なり

文館詞林盛事　一卷

唐許敬宗の撰の文館詞林の古本の我邦より傳へたる卷々の數及び本書よりきての説どもを集めたるものなり

此他官撰の者いすべて省畧す

大八洲學會發行書目廣告

久米幹文 著　栗田 寛 序

○大八洲史　全五編　太古篇　上古篇　中古篇　近古篇　近世篇

此史は久幹文大人の假名交りよ太古より近世よ至る迄を編年体よ筆記せられたるものなり●まつ太古は天地剖判よ起りて鵜草葺不合尊よいたり●上古は神武天皇より皇極天皇よいたり●中古は孝德天皇より安德天皇よいたり●近古は後鳥羽天皇より後陽成天皇よいたり●近世は後水尾天皇より孝明天皇よいたるなり●此年數三千年間の事柄を各徵証して其事實を平易よあかされたれは即ち本邦三千年間の事柄は女童子といへとも尤も心得らるへき寶典なり

本居豐穎 講義　田所千秋 筆記

○古今和歌集講義　全五編

本集の眼目は初學の心得やすからんか爲よ本居大人の精覈を撰みて說きあかされたる田所先生き、かきをつるなり凡そ此歌集の註釋は何くれとなくあまたありと雖とも此筆記の簡便よして能く其要領をつくされたるよ如くものはなし去れは詠歌者流ハ平生かならす座右をはなさす讀み味ハひて所詠の龜鑑となすへき珍書なり

千家尊福 講說　高橋光男 筆記

○風教百首講說　全壹冊

本書ハ千家尊澄大人の道の敎を和歌よて示されたる所の歌詠よつきて尊福大人の講說せられたるを高橋先生筆記せられたるものなり●凡そ本邦の皇道示敎の端緒を開かんと欲せは本書を繙よ在りと云はざるを得ざる良書なり

高平眞藤 著　久米幹文 閱　前田夏繁 閱　澤田穂國 校訂

○音訓假字便覽　全一冊

音訓及ひ假字用格等の書屈指すへからざるものありと雖も各長短ありて漸く其域よ升るも其室よ入る事堅く迷津の歎を發する者尠からず高平先生深く之を慨き多年刻苦して著されたる所なり然れば此書を繙く時ハ字音假字用格より五十音音訓清濁活語等口授を俟ずして一目の下よ了解せらるゝ簡易なるものよて雅俗を論せず片時も座右を放つべからさる金玉の良書なり

栗田 寛 編述　小中村清矩 序　內藤耻叟 序

○莊園考　全一冊

本書は本邦古昔の莊園よ於て其所領　所在　名稱及ひ其沿革等詳細よ古書よ徵し考證せられたるものなり然れは本邦古昔制度の沿革を知らんと欲するものは必ず此書を繙けい其詳細を心得へらるへき古今未曾有の寶書なり

木村正辭 著

○万葉集書目提要　全上下二冊

凡そ万葉集よは注釋等其幾千書類あるをしらす然れとも各長短疎密其要領を得ず是よ於て木村大人は多年其書類を蒐集して其著者の姓名并其所述の意を列載せられたるものなれハ本書を講究するものハ座右よ置て其方針を定むべき龜鑑となる寶書なり

本居豐穎 撰集　三條實美公題字　毛利元德公序

○大八洲歌集　全壹冊

本集は大八洲學會會員の出詠を撰拔し并よ明治聖代よ遭遇せられし此道の有名なる大人

等の歌を加へられたるものなり本會其本集卷の一を發行す次卷は時々撰集して刊行す附するものとす

定價表

●大八洲史　初篇
定價金四拾錢　郵送稅金拾六錢　通運賃全國平均金八錢
本史は太古の天地剖判より上古の神武天皇の御代を經て中古の應神天皇の御代に至る本文二百六十三頁　製本　假仕立

●大八洲史　次篇
定價金四拾錢　郵送稅金拾六錢　通運賃全國平均金八錢
本史い中古の仁德天皇の御代より起りおなしく孝極天皇の御代に至る本文二百九十三頁　製本　同上

●古今和歌集講義　初篇
定價金四拾五錢　郵送稅金拾六錢　通運賃全國平均金八錢
本書は本集の序の部の上卷と春歌の部半までの中卷と春歌の半より夏歌の全部の下卷を合卷として本文三百五十頁　製本　同上

●風致百首　全一冊
定價金貳拾錢　郵送稅金拾錢　通運賃全國平均金五錢
本書は上中下の三篇を合卷として百五十頁なり　製本　同上

●音訓假字便覽　全壹冊
定價金貳拾五錢　郵送稅金八錢　通運賃金四錢
本書へ百三十頁　製本　同上

●莊園考　全
定價金五拾錢　郵送稅金拾八錢　通運賃　仝　金八錢
本書は二百六十頁余　製本　同上

●万葉集書目提要　上下貳卷
定價金六拾錢　郵送稅金貳拾錢　通運賃　仝　金八錢
本書は上卷と附錄　下卷と附錄の合計三百余頁なり　製本　同上

●箱根七湯志　全壹冊
定價金二拾五錢　郵送稅金八錢　通運賃　仝　金五錢

●新編紫史　初篇
和本の部　上等　九拾五錢　中等　金七拾五錢　洋本の部　金四拾五錢
頁數四百四十余なり

○大八洲歌集　卷の一　印刷中
○大八洲史　三篇　近刻
○古今和歌集講義　次篇　近刻

●印は書籍の現存なり　○印は印刷中なり

江湖諸君中右書目ノ内御望ノものあらい本會へ直ち其購求金と郵送なれは郵稅通運なれは通運賃を添て御申込みあれいいづれも送本す

明治二十一年七月

日本橋區本石町一丁目一番地
大八洲學會

ZA-75

911.12
Ki192m2

国立国会図書館